

---

# ショーロアに吹いた風

光差す海

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

シヨローアに吹いた風

### 【Nコード】

N3898F

### 【作者名】

光差す海

### 【あらすじ】

この物語は、19世紀中ごろ、ユーロピアのハンムル国と言う架空の世界の物語。トレロの街に父親の作った借金の肩代わりに女中として売られてきた12歳の女の子、シヨローア。その街の炭鉱で働くちよつと悪いが根はまっすぐな炭鉱夫の少年、ジン。この二人を主人公にした物語である。シヨローアを買ったのは死の商人として巨財をなしているグレゴール・リトス伯爵。数多い女中の一人として毎日働くシヨローア。少しずつ仕事に慣れてくるうちに、ジンと出会い、そして、運命の輪が回り、二人は出会っただが……

•  
o

## 強く生きたい、あなたみたいに

この物語は、19世紀中ごろ、ユーロピアのハンムル国にあるトレロの街に

父親の作った借金のために、女中として売られてゆく女の子、シヨロアと、

トレロ街郊外の炭鉱で働く、ワルだが根はまっすぐな炭鉱夫、ジンを主人公に

した物語である。シヨロアを買ったのは死の商人として巨万の富をなしている

グレゴール・リトス伯爵。女中として毎日働くシヨロア。少しずつ仕事に慣れてくる

うちに、ジンと出会い、そして、運命の輪が回っていく……。

粗末な服に身を包んだ一組の親子がとぼとぼと山道を降りてくる。この坂を下りできれば、目指すトレロの街へ辿り着く。二人の視界には既にトレロの街が夕焼けの彼方に見えている。丸一両日歩きつめたので

二人はとても疲れていた。

「シヨロア、辛いと思うけれども、強くがんばるのよ。いつか必ずもう一度、必ず一緒に暮らせる日が来るからね。」

もう何度同じ言葉を聞かされたらう。いつしかシヨロアは返事も出来なくなっていた。見上げた空は夕陽のおかげでオレンジ色に染まっている。遙か遠くの山並みの向こうからは闇が迫ってきている。

ぎゅっと握り締めたのは大好きなラスクルお父さんがくれた口ザリオ。

「シヨローアに神のご加護がありますように。」と、自分の首にかけていたものをくれたのだが、外す時に留め金の部分が壊れてしまったのでポケットに入れて持ってきたのだ。

シヨローアも、母のシヨエリアも人並み外れた美しい顔だちをしていた。

特にシヨローアは少女らしく、目はクリクリとした二重で、忙しく瞬きを

繰り返し、微笑んだ口元は愛らしく、住んでいたスエバラーの街でも評判の子であった。

しかし、父親のラスクルが経営している製鉄会社は不渡りをだしてしまい、会社は潰れ、

一人娘のシヨローアは借金の肩に、連帯保証をしてくれていたグレゴール伯爵の家へ

女中として赴く事になってしまい、ラスクルらはあらゆる金策をしたもののどうしよう

もなかった。そうして、昨日より一昼夜かけて、母シヨエリアと共にトレロ町まで

歩いてきたのであった。シヨローアの美しい瞳も、今は輝かず、憂いを帯びるのみであった。

「ここのようね……。着いたわ。」シヨローアは長い距離を歩いたので

ヘトヘトで、立っているのも辛いくらいだった。お腹もすいたが、何も

食べ物がない。シヨエリアも何も食べていないし、それどころか今日の宿すら

見つかるかどうかともすらかからない。一体どうするの、と聞こうとして聞けなかった。

シヨローアにはそんな余裕すらなかった。自分のこと、これからの不安でいっぱいだった。

お屋敷はとても大きく、周りをぐるつと高い白い塀で囲んであった。

小さなお城すらも思わせるような巨大な構えの門に、二人はたじろいでいると、

中から金縁眼鏡のしわしわのお爺さんが何かムシヤムシヤ食べながら出てきた。

「おお、おー、ようきなすった。わしがグレゴール家の執事のモロチヨフですじゃ。」

あー、あんたがシヨローアか。これはたいそう綺麗な娘が来たのう。まあ入りなさい、今夜からの住みかを教えてやろつ。あんたがお母さんかね。」

と、一人で話しながらモロチヨフ執事はのそのそ歩いてゆく。シヨローアは

直感的に、この人は信頼できる人かも、と思った。モロチヨフ執事は優しい人の

ようだった。シヨエリアと二人分の暖かいスープとパンを用意してくれていた。

「食べたらシヨローアの部屋に案内するぞ。離れにあるんじゃ。」

シヨローアはパンを食べながら、自分が住み込んで働くグレゴール邸に驚き果てていた。

ここは比較的手狭な、来客用の食堂のようだが、テーブルから調度品からまばゆく輝いて

いる。すぐにシヨローアは理由が分かった。天井にシャンデリアがあるのだ。そんなものは生まれてこの方シヨローアは見た事もなかった「お母さん・・・すごいお家ね。」

「そうね・・・でも、だからこそ厳しいはずよ。でもね、グレゴールさんとラスクルお父さんには商売上の付き合いがあつたから、他の女中さんとは違う扱いをしていただけるはずなの・・・。」

シヨローアには何も分からない。ただ、自分の運命を受け入れていくだけだ。

ただ、強く生きよう、私は何にも負けない、とだけは誓っていた。食事の後、一人のやせたキツイ表情をした女性が入ってきた。

「どうも。女中長をしているミサです。シヨリアの部屋に案内します。」

とだけ言つと、さつさと踵を返し進んでいく。急いで二人はついて行つた。

ぐんぐんと広い屋敷内を進んでいくうちに、倉庫のような場所についた。

ひどく暗いのは明り取りの天窓ぐらいしかないからか。そしてさらに階段を下りる。

どうも地下らしい。「ここよ。この部屋ね。今日は二人で寝てくださつてよいとの事。」

布団は二人分あるから。明日は6時起床だからね。」

とだけ言つて、あつという間に去っていく。狭い3畳ほどの部屋に、

汚い机と小さなタンスとハンガー掛けだけしかない。布団は床に無

造作に置いてあった。シヨエリアのほうが悲しくなつて、泣き出してしまった。

「お母さん泣かないで……。私一人には十分広い部屋よ。」

シヨーロアはかいがいしく持っていた鞆から服などを出し始めた。タンスの上に大好きなルシア人形のアリーナを置いた。でも、すぐに思い直して、アリーナの髪を櫛で梳き始めた……。

シヨエリアもシヨーロアも長旅で疲れ果てていたのですぐに眠ってしまった。

空には無数の星が輝いている。神様はシヨーロアにいかなる運命を与えるのだろうか。

光る星すらもいつかは消えてしまふけれども……。今日は輝いていた。

翌日、シヨーロアは本当に朝6時に起こされた。渡された女中服に着替える

シヨーロアを見て、シヨエリアはまた泣いていた。おそらくお母さんに会えるのは

これが最後で、当分会えないだろう、いや、ひょっとしたらもう一生会えないかも

しれない、と思ったらシヨーロアも泣けてきたが、ぐっと我慢してお互い抱き合つて

部屋を出た。ミサが階段のところで待っていた。既に怖いオーラが出ているようで

シヨーロアは背筋が寒くなった。

「まず、井戸から水を汲み上げて洗濯をするんだよ。したことある

だろ？」

シヨローアは水汲みはしたことはあるが、洗濯はしたことがなかった。

「ええっ！？したことがない。おいマチルダ、教えておやり！」

気づいていなかったが、他にも女中はいるのであって、その中の一人、

丸々と太っている女の子が箒を持ってやってきた。シヨーリアより少し年上っぽい。

「紹介するよ、今日からうちで働くシヨローアさ。こっちはマチルダ。

うちにもう3年いるから何でもお聞き。いちいち私に聞くんじゃないよ。」

愛嬌のある顔をニコツとさせて「よろしくねシヨローア。」と挨拶された。

シヨローアもよろしくお願いします、と頭を下げた。ミサはスタスタと行ってしまった。

「じゃあ、まずはあそこの桶を持ってきて、こっちの水路で洗濯するからね。」

言いつつ自分も桶を取ってきて、井戸の横のポンプをぐいぐい押す。

そして、あがってきた桶をひょいと持ち上げ、足元の持ってきた桶にザーッと水を入れて水路のほうへ行ってしまった。

「よし・・・。」とシヨローアもポンプを持つ。重い！両手で思い

切り力を込めて

ようやくと動く程度だ。必死に井戸から桶を上げてきて、パツと手で止めないといけないのだが、それが出来ず、桶がまた下までガラッ  
ーッと

降りていつてしまった。やり直しだ。また必死にポンプを押す。井戸水を汲む事すら

こんなに大変だとは！ショーロアの額から汗がにじみ出てきた。

ようやく井戸水を汲んで、屋敷横手にある用水路まで行くと、マチルダが

どこからか両手に大量の服やシーツなどを抱えてやってくる。

「よいしょっと。まだいっぱいあるんだよ。あんたはそのタライを使って

片端から洗っていくの。そこに洗剤があるからね。」

「は・・はい。」と、とにかく洗えばいいんでしょう？とショーロアは

桶に洗剤を入れ、泡立て、用水路の水にシーツをつけてタライでゴシゴシやり始めた。季節は秋なのに、水がとっても冷たい。

知らなかった、お母さんは毎日こんな事してたんだ。私は学校に行  
って

家に帰ったらいつも洗いたての綺麗な洋服が畳んでおいてあった。

桶の水が無くなればまた井戸に汲みに行き、水を絞り、物干し竿に洗濯物を干した。ショーリアは朝からヘトヘトになった。そしてようやく朝食。

もちろん濡れた服のままだ。地下室の、ショーロアの部屋の奥の突き当りが

女中の食堂らしい。自分の部屋の前を通ると、ドアが少し開いてい

た。

お母さんはもういなかった。食事は硬いパンと牛乳とチーズだった。家の時よりも

明らかに質が落ちている。そんなに裕福じゃなかったけれども・・・。

シヨローアはテーブルを囲う女中仲間を見渡した。みんな余り話をして

いないが、マチルダだけは陽気に何か言っている。シヨローアの事を紹介してくれたが、みんなほとんど関心も無いらしい。会釈したが、ほぼ無視された。全部で10人ぐらいいる。他に、召使とか運転手？らしき雰囲気の人もある。使用人はまとめてここで食事らしいけれども、

これだけの人を雇っているグレゴール伯爵とは一体どんな人なのだろうか？

などと考えていると、隣金髪をひつつめた無表情な子が、肩を突いて来た。

「お皿洗いするのはあんた。」とだけボソツと言われた。無表情だが、

本当は相当美しい子なんじゃないか、表情が暗いだけだ、とシヨローアは思った。

お皿洗い・・・もほとんどした事が無い。でもやるしかない。スポンジに洗剤をつけて

ゴシゴシとやっているうちに皆いなくなった。少し気が抜けた瞬間、コーヒカップを

床に落として割ってしまった。たちまちミサがどこからか入ってきて叱られた。

「駄目じゃないか、高いんだよコーヒカップだって。繰り返すなら給料から引くからね。」

給料？給料なんてもらえるんですか？とショーロアはきょとなつて聞いた。

「いくらなんでもただ働きって事はないさ。それにグレゴール伯爵は気前いいんだよ。」

さあいいから手を動かしなさい。」

とだけ言つて去つていった。知らなかった。てつきり丁稚奉公かと思つていた。

でもいくらぐらいもらえるのかはわからない。後でマチルダさんに聞こうかな・・・。

その後、午前中は吹き掃除、床掃除だった。使い慣れないモップで廊下を

よたよたと拭いたりした。水が残り、かえって汚しているような気がしたが、

案の定またミサに怒られた。当分こんな感じだろうな、と思うとショーロアは

悲しくなった。大事にポケットに入れている、ラスクルお父さんにもらった

ロザリオを握り締めた。神様、お父さん、私を守って・・・。

日も暮れ、長い一日が終わった。12歳のショーロアにとって、一日中肉体労働を

する事などこれまで一度もなかった。体中が筋肉痛だった。アリーナを抱きしめた。

「うっん、大丈夫よアリーナ・・・。すぐに慣れるわ。アリーナが側にいてくれるから。」

すぐにショーロアは泥のように眠った。明日の朝も早いのだ。

二日、三日と過ぎていく。シヨローアは、この屋敷に巨大なムク犬が飼われているのを

知った。名前はナポロエンと言らしい。シヨローアと同じくらいの巨体で屋敷内を

歩きまくる。本人は巡回でもしているつもりなのか知らないが、目がふさふさした

体毛で覆われているので、恐さはなく、むしろおっとりした印象である。やがて

シヨローアになつき、シヨローアの大事な友達になった。

三日目の夜、給仕の仕事を始めてすることになった。とは言え、出来た料理を運ぶ

だけの仕事だが、この時初めて当家の主、グレゴール伯爵を拝見する事が出来た。

と同時に、息子であるアノンとも出会った事になる。伯爵と言うからもお年寄りかと

思っていたが、案外若い。ラスクルお父さんよりほんの少し年上ぐらいに見える。

綺麗に髪の毛をなでつけ、上品なシャツを着込み、パイプを加えて新聞を読んでいる。

目つきは大変鋭く、どこか近寄りがたい空気を持っている。料理の載った皿を

こわごわ持っていくシヨローアに気づき、「おお、君がラスクルさんの娘だな。

悪いようにはしないからせいぜい頑張りなさい。彼もやがてまた何かしらの

事業が起こせる算段があるからね。」と言って微笑んでくれたが、その微笑に

何かしらの不安を感じさせるものがあつた。それが何かはその時は

わからない。

ふと視線を感じて目を流すと、伯爵の息子だろうか、金髪を耳まで伸ばした18歳

くらいの若い青年が、じーっとこちらを見ている。シヨローアが戸惑っている

声をかけてきた。「俺はアノンさ。君は名前は？」と尋ねられたので、シヨローアです、

と答えると「ふうん、シヨローアかあ。いい名前だな。」とだけ言っただけは黙った。

食卓には後は伯爵夫人のサラしかない。ここは三人家族だと言うのは

もう知っていたが、改めて三人住まいの家としては余りにも広すぎると思った。

四日目に、マチルダと二人で買い物に行く事になった。女中としてグレゴール家に

やってきて以来、初めての外出だ。初めて歩くトレロの街。ハンムル国と、隣の国ラフスの

境い目に位置し、大きく広がる美しいエーベ海に面する古い歴史を持つ港町なのだ。

道のアップダウンが激しく、坂道を降りたり上ったりしなければならぬ造りに

なっていて、シヨローアは歩きながら、これは移動が大変な街だなあと思った。

北側には山々が連なり、その向こうにシヨローアの故郷のスエバラがある。シヨローアは

その山並みを越えて、この街へやってきたのだ。おしゃべり好きの陽気なマチルダは、

あそこに役場があって、あそこが洋服屋、と言う風に、聞いてもい

ないのに勝手に  
教えてくれて、シヨローアは面白くなった。

「マチルダさんって、街のガイドさんみたいですね！」とほめると  
マチルダは照れて

「ずっと住んでるからね。アタシは、小さい時に両親が二人とも死  
んじやって

親戚の叔父さんの家に住んでただけど、叔父さんは兵隊に取ら  
れて死んじゃった。

アタシのほかにな小さな兄妹がいてね、奥さんがアタシを食べさせ  
られないって

事になってね。」私は・・・お父さんが仕事に失敗して・・・

「

「おっと、聞いてないよ。言いたくない事は言わなくていいさ。」

と言ってマチルダは口笛を吹きだした。シヨローアは、その心使い  
にますます

嬉しくなった。3歳しか変わらないのに、なんてすっかりしてるん  
だろう、と思った。

辿り着いたのはパン屋、果物屋、八百屋などの店が立ち並ぶ商店  
街だった。

シヨローアがびっくりしたのは、とにかくこの街の人の多さだ。山  
奥の小さな町で

育ったシヨローアは、こんな都会に出てきた事すらなかった。何も  
かも珍しいし

目新しい。マチルダはてきぱきと買い物をし、シヨリアの持って  
いる買い物籠に

バナナやソーセイジなどをドンドン入れる。自転車すごい勢いで  
横を通り抜けた。

買い物が終わり、二人が帰り道を歩いていると、横の路地裏で誰か

が言いあい

をしているのが見えた。

「あつ、あれはジンじゃないのさ。バカねえ、ジンにケンカ売っても勝てないのに。」

見れば路地裏の奥で、二人の少年が今まさに取っ組み合いのケンカを始めた

ところではないか。ショーロアは恐くなって「行きましよう、マチルダさん」と言ったが

マチルダはニヤニヤして眺めている。しょうがないので、またこわごわ覗き込んだら、

もう決着はついたらしい。一人の少年がこちらにやってくる。もう一人は向こうのほうで

道路にのびているようだ。「ようっ、マチルダじゃないか。見てたのかようー。」

粗末なジャケットに、ざんばら髪をぐしゃぐしゃかきながら少年は快活に声を

かけてきた。頬がすすけているが、目がキラキラ輝いているように見える。

「あれはハックじゃないの？なんでケンカしたの？」

「あいつ、勝手な真似をしてくれたのさ。俺らは抜け駆けは許さねえ。」

だろ、お嬢さん。「いきなりお嬢さん、と呼ばれショーロアはびっくりして

何も反応が出来なかった。一方、ジンのほうも、視線を外せなくなった。

「この子は新しいグレ伯爵んとこの女中なのかい？」ショーロアを見つめながら

マチルダに尋ねる。「そうよ、ショーロアってのよ。覚えといてあげて。可愛いでしょ。」

マチルダはカラカラと笑う。ジンは、ようやくショーロアから視線を外し、

「ああ、そうだな。」とだけ言った。そして、ポケットからガムを出してマチルダに渡し、

「二人で食vena。じゃあな。」と言ってスタスタと去っていった。ススのような、

何かが焦げたような匂いがした。「アイツ、ここのガキのボスなのよ、ジンって言う。」

とにかく腕っぷしが強くて、この街じゃ知らない子はいないわ。でもいい奴なんだ。」

早速もらったガムを噛みながらマチルダは言う。ショーロア一枚もらったが、その場では

食わずにポケットに入れた。「さ、帰ろうか。」二人は帰途についた。

帰った後、シャンデリア磨きをした後、お昼からは倉庫の整理をすることになった。

一緒になったのは、金髪をひつつめてくくっている、無表情のエリア。年はたぶん

同じくらいだろう。相変わらず一言も口をきいてくれない。黙々とダンボール箱を

運んでいる。重いものはお抱え運転手のジドさんが運んでくれる。運転手でも、仕事が

無い時はこうして色々な作業をするらしい。ヒゲを蓄え、動きが機敏だ。年はもう50歳

近いだろうか、これまで何をしてきた人なのかしら、などとショーロアは考えていたら、

誤って小さな、でもかなりずっしりと重い箱を床にゴトツと落とし

てしまい、中のものが

出てしまった。ショーロアはハツとした。「気をつけろよ。足に落とすなよ、怪我する。」

と言つて、ジドがすぐに中身を拾い、箱をテープで直してくれた。

「あの……。ありがとう」

「ございます、今のは、ピストルの弾ですか？」ショーロアは恐る恐る尋ねた。

「ああそうとも。ピストルじゃなくてライフル銃のだな。長い奴だ。」と、構える仕草を

してみせる。ライフルの弾……。何故そんなものがこんなにいっぱいこの屋敷の倉庫に

あるんだろつ、と思つたが、心にしまふ事にした。

その後、倉庫内を掃き掃除している時、エリアが初めて話しかけてきた。

「アンタ知らないのかい。グレゴール伯爵は武器商人なんだよ。」

ショーロアはびっくりして思わず唾を飲んだ。伯爵とは、名誉ある地位であつて

そういう商売なんかはしないものだと思つていたのだ。

「伯爵つて、貴族でしょう？貴族の方が商売を？」と言つと、ミレアはニヤツと

笑つた。「あんた世間知らずだね。お嬢さんだったのか知らないけど、

伯爵だろつが公爵だろつがそんなものは金さえあればどうにでもなるさ。

この家は武器を売買して大儲けしてるつてわけ。銃だけじゃないよ。もっと恐ろしい爆弾とかも作ってるらしいよ、ここにはないけどね。」

とだけ言つと、また掃除を始める。爆弾……。ショーロアの心にはそれが途轍もなく恐ろしいもののように響くのであつた。

庭園の隅に、ゴミを燃やす焼却炉がある。そこへ、掃き集めたゴミを

捨てに行くと、茶色のセーターにグレイのパンツをはいたアノンがいた。

「やあ。」と微笑みながら声をかけられた。シヨローアも「こんにちは、

お疲れ様です。」と返事を返した。昨晚以来だが、ずいぶん態度が打ち解けた感じになっている。「仕事には慣れてきたかい？」と聞かれたので、まだ、まだですとだけ答えた。仕事はまだ残っているし、

戻ろうとすると、まだ話しかけてくる。「キミは、どこから来たの？」

「何故、ここへ働きに来たんだい？」などと余り遠慮がない。でも、伯爵の

息子だから邪険には出来ないので、少し不愉快を感じながらも、返事をしていたら、

向こうのほうからシヨローアを呼ぶ声がする。「あのっ、呼ばれていますし、

仕事中ですの。」と言うと、「ごめんごめん、じゃあまたね。」と、行けという

合図をする。振り返ると、まだこちらを見つめていた。不思議な人とシヨローアは思った。

「そんでハツクの野郎どうするんだい？」とケニーが聞いた。顔中真っ黒だ。

ここはトレロの街のはずれ、トツテムの炭鉱だ。夕方遅くなり、互いの顔も

そろそろ認識しづらくなる頃、数人の少年が顔や足を川のせせらぎで洗いながら

話している。彼らは炭鉱で働いているらしい。「ワビ入れてくるだろう、そしたら許す。

アイツの財布は持って来てるからなあ。アハハ。」「理由は何なんだろう。抜け駆け

するようなタマかな？」と聞いたのはスニー。痩せているが、賢そうな顔をしている。

ケニーは対照的に、余り賢くはないが、運動神経は抜群だ。「聞いても言わなかったん

だよな、それが。何か深い訳でもあるのか……。ま、わかんねえ。」ジンは顔をタオルで

拭いて、「ま、そのうち会いに来るだろ。来なけりゃこっちから行くし。帰ろうぜえ。」

もう一人、巨体だがスローモーなマイティーも含めて、四人は家路につこうと

歩き出した。「アイツ、まさかとは思うけど、あの場所を誰かに話してないだろうな？」

ケニーがポツリと呟く。「それはない。言えば全部取られるってアイツも知ってたあ。」

スニーがいつになく強い口調で言った。ジンが今日とつちめたハツクが一番の親友は

スニーだ。家も隣なのだ。それだけに、今回のハツクの抜け駆けにもっとも心を

痛めているのだ。「そうだ、それだけはしない。あそこは俺らだけのものだ。」と

ジンは同調するように、ハツクをかばうように言った。ふと、今日ハツクとケンカした後

路地裏の出口に立っていた長髪の目の大きな子の事が頭に浮かんだ。すごく印象に残って、胸がドギマギしたのを思い出していたら、ケ

ニーが

心配そうに覗き込んでいる。「あ、いやこれは違うんだ、その・・・

「とジンが  
妙な事を言い出したので、「何が違うんだい。」と聞かれ、さらに  
しどろもどろに  
なるのであった。

案の定、ジンが自分のボロアパートの前に辿り着くと、ハックが  
申し訳なさそうに  
立っていた。「悪かったよ、財布を返してくれ・・・。」ハックは平  
謝りだ。

「なんで抜け駆けした。今度こそ言え。」ジンは睨みつけた。実は・  
と

ハックが説明するには、街の怪しいカジノもどきのところにたまた  
ま入り込み、  
ポーカーで負けて借金を背負ってしまったので、アレを売って払お  
うと思ったと言う。

「何で素直に言って相談しないんだ！なら俺たちは許したのに！」と  
怒鳴りつけた。ハックは涙目になっている。「馬鹿にされると思っ  
て・・・。」

ジンはハックの胸に財布を投げつけ、手を引っ張って言った。

「行くぞ、リベンジだ。」しかし、その時ジンの腹が鳴った。「・・・  
・飯食ってからな。」

——夜もふけてくる頃、ジンとハックはトレロ街の繁華街の隅っ  
こにある  
怪しげな小屋に辿り着いた。「ここかよ。」「そうだ。」「汚ねえ  
リアルコールくせえ。」

立て付けの悪い扉をぐいっと空けると、大勢の大人が大声でテーブ  
ルを囲んで  
トランプやサイコロゲームをしながら酒を飲んでいる。所狭しと人

がいるので

誰がなんだかよくわからない。が、ハックが言う。「あつ、いるよ、アイツらだ。」

一番奥のテーブルに、柄の悪そうな崩れた服装の20歳前後の若者が固まってタバコをふかして、確かにポーカーらしきものをしている。その内一人が、

「おつ、一昨日のガキじゃねえか。金持ってきたのか？今日が期限だったよなあ？」

と言った。ハックが黙っていると、ジンが「一昨日の負けの分は持ってきた。」と

少なくない札束を見せた。一瞬テーブルがどよめいた。「ほほっ、ガキのくせに

持つてるじゃん。最近製鉄関係ならガキでも稼げるって言うしな。」と、リーダーらしき

坊主頭の眉毛の濃い、サスペンダーにTシャツで筋骨隆々とした男がさつさと

札束をポケットにしまいこんだ。「上出来だ、帰っていいぜ。」とまたゲームに

戻ろうとする。ジンが「次は俺と勝負しろ。」と間髪入れず言った。

「おつ、お前もやるの？いいじゃねえか、そう来なくちゃ。種銭はまだあるのか？」

「ある。心配するな。今日の分も熨斗をつけて返してもらうぜ。」

「ヒヤッハーツ、いい度胸だこのガキ。おい、クルス、そこ空ける。サシで勝負だぜ。」

ポーカーでいいんだろうな？コイン一枚10ラフンだ、いいか？相手は俺だ。」

さっきの坊主頭がドッカーとテーブルの上のものを床に落とし、準備を始めた。

「か、勝つ自信はあるのかいジン」ハックは震えている。「コイツに俺は負けたんだ。」

とんでもなく強い引きで、フォーカードなんて食らっちゃった。」

ジンは椅子に座りながら

「黙ってみてろ。」とだけ言った。坊主の取り巻きは三人でテーブルの向こうに腰掛け、

ニヤニヤとしながら思い思いにビールを飲んでタバコをふかしている。

「ルールはコイン20枚が尽きれば負け、ワングेम500ラフン、それとは別に

コイン一枚10ラフン分も勝利者の総取りだ。いいな?」「わかった。」

「カードを配るのは一回のコール毎に交代だ。構わんな?」ジンは頷く。

「んじゃあ、先に配るほうをコインの表裏で決めよう。」と言って、坊主頭は一枚の

コインをポーンと放り上げ、手の甲でバシッと受けて隠した。「どつちだ?」

「裏。」「じゃあ俺は表。」コインは表だった。坊主頭がシャッフ

ルする。そして5枚ずつ配る。まず、参加に一枚のコインがいる。そして、カード交換にも一枚の

コインを使う。そして、勝負の際に1枚から、自信があれば最大残り全部の枚数のコインを

かけられると言うルールだ。坊主頭は一枚だけ交換した。

一方、ジンの手はとても悪い。ブタと言う、何一つ役の揃ってい

ない手だ。

Aだけ残してあとは交換する。「……」。「ははは、駄目みたいだな。俺は勝負だ！」

なんと10枚も出してきた。ジンは内心齒軋りした。これで負ければ10枚出さないと

いけない。ツーパー役しか作れていない。これでは勝てないが、仕方ない。

「コール」と言って1枚だけ出した。「俺はフルハウスだ！よし、後10枚出せよ。」

あつという間に計12枚のコインを失った。残りは8枚だ。次はジンが配る番だ。

シャッフルし、それぞれに配っていく。ハックはまんじりともせず見守っている。

が、今度もジンは手は悪かった。坊主頭もそんなによくなかったので、3枚だけ

出してきた。が、結果はまたジンの負け。さらに5枚コインは減った。後3枚、

ぎりぎり1ゲーム参加出来る。「ははっ、これで負けたらもう終わりだぜ？」

坊主頭は完全に余裕をかましてシャッフルをしている。ハックはじつと見ている。

この前も、何かがおかしかったんだ……。でも、見抜けなかった……。坊主頭が

配り始めた。そしてお互いがカードを取って開く、その時！

「おい！てめえ、今何やったんだ！」と、ジンが言ったかと思うと、テーブルを

ガッタンとひっくり返した。ハックが「ジン、な、何を！？」と言った後、

坊主頭の手元を見たら、なんと横の相棒からカードを受け取ってい

るではないか！

慌てて隠す坊主頭、顔中から汗を流している。「し、しまった、このクソガキが・・・」

「相棒にカード回してもらえばそりゃ負けないよなあ！このイカサマ野郎！」

ジンは言うが早いか、坊主頭のポケットからさっきの札束を取り出した。

「コイツは返してもらっぜ！じゃああばよ！」とハックを引っ張り踵を返して逃げ出す。

「ちくしょう、追いかける！」坊主頭らは慌てて追いかけたが、二人の逃げ足の

早い事早い事。といてい追いつけないので、息を切らしながらとぼとぼと店に帰ってきたら、

魔王のような風貌の店主に「グラスだの皿だのが割れてるが、弁償してもらおうか？」

と言われた。逆らえるわけもなく、坊主頭はしぶしぶ払おうとポケットに手を入れたが、

財布がない。「ちくしょう！あのガキ財布まで抜いていきやがったーっ！」

二人は笑い転げながら家路についた。「ダンスウィズウィンドを舐めるなっつてんだ！」

ダンスウィズウィンド、通称ダウィ団はジンたちの作っている秘密クラブの名前だ。

ジン、ハック、スニー、ケニー、マイティーの五人で作っている。

彼らはみな、トッテム

炭鉱の炭鉱夫だ。ショーロアと同じような身の上の子もいれば、家から通っている子もいる。

ジンは中肉中背で黒髪をざんばらにしている。ケニーは金髪の栗毛

で、背は低いが運動神経は

抜群だ。ハックはやや太っているものの、短い毛を立ててカッコをつけている。サニーは

白くて華奢だが、物知りで通っている。マイティーが一番体が大きく、無口だが頼もしい。

彼ら五人の結束は深く、それはとある秘密を共有しているからなのだが・・・。

ショーロアは窓すらない地下の一室で、汚いランプの光だけを頼りに、

お父さんとお母さんに手紙を書いていた。なんとか頑張れそう、とこう書いておかないと、二人ともどれだけ心配するかわからないし、ショーロア自体、本当になんとかかなりそうな気がしてきていたのだ。女中長のメサさんだけは恐いけれど、後は、不愉快な事は今のところない。

体はともしんどいけれども、気持ちしだいでなんとかなる、と思っていた。

手紙を書き終え、ランプを消して布団に潜り込む。今日初めて見たトレロの

街並みを思い出して、こんな素敵な美しい港町に住める、そう思っ  
て自分を慰める事にした。そう言えば・・・。ポケットをまさぐると、噛まずにいたガムがあった。今かもう。

甘いオレンジ味だ。おいしい。くれたのは・・・ジン、だったわ。

荒々しい雰囲気

だったけど、まっすぐな目をしていた・・・。やがて、疲れているショーリアは

まどろみながら眠りにつくのだった。

やがて、初めての日曜日が来た。クーラスト教の信者たちはみな、

日曜は働かない。一切の労働が宗教の教えで禁じられているからだ。グレゴール家の女中もそれは同じだった。例外を除いて、基本的に日曜は自由らしい。午前中は全員揃って教会に行くことになっていて、

その後は自由にどこへでも行っていていい、ただし7時までには帰る事、とミサが教えてくれた。でも、ショーロアはほとんど無一文なので、どこにも行けないな、と思っていたら、マチルダが道中に縫い物の切れを買いに行くから一緒においでと言われた。そうね、見るだけでも

楽しいよね、と割り切って、ついていく事にした。

「あとう、マチルダさん、給料って、いつ、どのくらいもらえるんですか？」

「あんたそんな事も知らないの。給料は月末、私は500ラフンもらってるよ。」

あんたはもうちょっと少ないかもしれないけど。」

と言う事は、300ラフンぐらいかな。300ラフンあれば本とか安い服なら

買えるかも知れない……。後、家にも送れば少しは役に立てるかも……。。

ショーロアは少し嬉しくなった。そうだ、ロザリオの留め金を直そう。

いつも首にかけていたい。後、アリーナに鞆を作ってあげよう。

と、お尻の横に何か当たった、と思ったら、ムク犬のナポロエンだった。

「ナポロエンも教会に行くの？信心深いのね。」と話かけると眠そうに首を振る。どうやらあんまり行きたくないらしい。

「ふふつ、義務で行くって感じね。」と、マチルダと二人で声を上

げて笑った。

「・・・そうしますと、開戦の日が近い、と言うわけですか？」  
レゴール伯爵は言う。

「いや、まだわからないが、相当数の兵がラフス国の国境地域、ヤナラに集まっている。

ラフスのゴド・ゴール首相はご存知の通りの帝国主義者だ。我が国の天然資源が

喉から手が出るほど欲しいらしい。我が国としては常に警戒しておくに越した事はない。」

そう言つてハンムル国国防次官、ラケーシは葉巻に火をつけた。こ  
こはレゴール伯爵の

経営するレゴール商事会社の応接間だ。向かい合っているのは二人だけ。

「受注分は順調に生産されています。要請があれば、さらに規模を大きくすることも

可能ですが、その為には資本をどうにかして援助していただきたい。  
い。」

「それはなんとでもする。ハンムル国王も、ハガス首相も、現状は  
軍事増強が

最も大事だと言う事で一致している。だが、そもそも国家の領土  
規模から、

兵隊の頭数まで、ラフスには到底及ばないのが現状だ。よし、と  
もかく

さらなる銃器と弾薬の増産をお願いする。連絡は追ってすぐする。  
」

「わかりました。祖国に栄光あらん事を。」  
ラーケツシ国防次官は

去っていった。

一人残ったグレゴール伯爵はタバコに火をつけて黙考した。祖国の栄光など

どうでもいい、と思った。商売相手は誰でもどこの国の人間だって構わないんだ。

万が一のために、ラフス国との人脈も構築しておく必要があるな。

タバコを消し、窓からトレロの美しい街並みを眺める。家々と自然が見事に

調和した、本当に風景として上等そのものだ。モーネなる当代一流の画家が

気に入って住み込むだけの事はある。彼は毎日港に行ってスケッチをして

飽くことがないと言う。だが、その美しい街並みも……。

教会での祈りが終わり、マチルダとショーロアはまずパン屋でパンを買い、

広場で二人で食べた。そして、反物屋へと向かう途中、金髪のエリアに出くわした。

見ると、同じ年頃の、あばた頬でカールの頭の、背の高い少年と手をつないでいる。

ショーリアはそのませっぷりに少々びっくりした。エリアは何も言わず、すれ違っていた。

「びっくりした。あの子、彼氏なんか作っちゃってまあ……。」

「エリアさんは私と同じ年ですよね?」「そうだよ。あの子、暗いくせにねえ、ちゃっかり

してる、あははっ。」「マチルダは大きな声で笑った後、声を潜めて

言った。

「そういえばさ、あんたもチャンスがあるかもよ。」「えっ？チャンス？」

「アノンのお坊ちゃんいるでしょ、あんた気に入られてるらしいよ。」

「ええっ？一体誰にそんな話を聞いたんですか？嘘ですよそんなの。」

「そういう噂が回るのは早いんだよ。もし上手く行けば伯爵子息のお嫁さんになれるかもよ？こんな生活とさっさとおさらば出来るよ。」

ショーロアにはとんと見当もつかない話だった。結婚なんて考えた事もないし、そもそも、恋愛だってまともにしたことすらない。

気がつけば、またナポロエンが側にいる。二人と一匹は、秋風の爽やかな街並みを、太陽のぬくもりを受けながら歩いていくのだった。

「あの子かよ。なるほどお、超力ワイイじゃん。」「だろう・・・。」

「ジン」はひそひそ言った。ケニーと二人、教会の裏側の森の中で昆虫採集をしていたが、

その時、たまたま教会にやってくるショーロアを見つけたのだ。木陰に身を潜め、

出てきたところを着いて行き、今ようやく、ケニーが顔を確認できるほど近づけたのだ。

二人は曲がり角の壁に身を潜めている。ちなみに、集めた珍種の蝶はこの後古道具屋に

標本材料として売りに行くのだが。「マチルダというなら、話しか

ければいいんじゃない？」

ジンはケニーの頭をゴツンと殴った。「馬鹿、それが出来りゃあ苦労はねえ。こんな風に

コソコソ尾行するかよ。」「ごもつとも。」「二人は何をするでもなくショーロアを眺めている。

「おい、先にとりあえず蝶売っちまうか。金が出来たら何かアイデアが

思いつくかも知れねえ。」「そうするか、よし、こっちから回れば会わないぞ。」「

「あつ、いけない。遠回りしたわ。こっちから行こう。」「マチルダは方向転換した。

まだ道に疎いショーロアと、お供のナポロエンもついていく。

五分後、マチルダ一行とジンとケニーは鉢合わせることになった。

角を曲がると、すぐ前にマチルダとショーロアがいた。「うはっ

！？」ジンは固まった。

「あら、ジンじゃない。今日は何してるの？」何も知らないマチルダは愛想よく

話しかける。ジンは言葉に詰まったので、代わりにケニーが「お、俺ら古道具屋に

売るものがあるのさ。」と答えた。「ふーん。今日はガムくれないの？」と

マチルダは図々しいことを言う。ジンは慌ててジャケットをまさぐったが、どうも

都合の悪い事に今日は持ち合わせていないようだ。その間ショーロアの

視線を感じて恥ずかしくって仕方ない。慌てたものだから内ポケット

トにしまっていた  
ハンカチやらゴミやらをまき散らかす事になった。そのハンカチが  
ショーロアの  
足元に落ちた。ナポロエンはうずくまってあくびをした。薄汚れた  
ハンカチを  
ショーロアに拾ってもらったジンは、恥ずかしくてろくにお礼も言  
えない。

しかし、度胸だけは人一倍のジンは、「ガ、ガムは無いけど代わりに何かおこつてやる。」  
と言った。マチルダは大喜びし、「そうこなくっちゃね、街のガキ  
大将。さ、  
ショーロア、何か買ってもらおう。ジンは炭鉱で稼いでるからねー。  
」と、

もう何をおこつてもらうか思案している様子。ジンは内心この図々  
しい女が、  
と思ったが、ショーロアの手前そんな事を言えるはずもない。とも  
かく、  
四人と一匹で歩き出したが、ジンはショーロアの顔を見れない。代  
わりに  
ケニーがそれとなく覗いてみると、やはりそれなりに嬉しそうだ。  
これはひよつとしてひよつとすると、ひよつとするのかもな、など  
と思いながら  
歩くのであった。

反物屋「マロッセ」はとても綺麗なお店で、さまざまな素材が置  
いてあった。  
ショーロアは嬉しくなって、あっちこち見て回った。アーリーナの  
鞆の材料が  
欲しいのだった。一方、ジンとケニーにはこの店は退屈そのものだ。

入り口付近に佇むだけで、お客さんの出入りの邪魔でしかない。しかし

そんな事は知らず、ジンは満足していた。ショーロアが目を輝かせているのを

見たからだ。長い黒髪にたまに隠れるが、横顔も可愛い、などとぼうつとしていたら、

マチルダに催促された。「おう、待てる。」と声だけかけ、ジンは反対のショーロアのほうへ向かった。「何でも、いいんだぜ。言いなよ。」と

声をかけた。若干声が上ずっているのが自分でも分かってしまった。

「はい・・・本当にいいんですか？、なら、これを・・・。」と指をさされた商品を覚え、

店員を呼び、必要な長さを切らせた。その後、マチルダの分も買ってやって

マロッセを出た。ジンの財布はスツカラカンになった。が、後悔などしていない。

二人に散々お礼を言われ、わざとスカした返事をして、ジンとケニーは別れた。

「上手くやったなあ。いい印象持たれたらうな！」ケニーが言う。

「へっ、どうだろうな。しかし可愛いよなあ。・・・女中か・・・。

日曜は自由なんだな。」

「また会いたいってわけね。」「そういうことだ・・・まあマチルダと仲よさそうだし

なんとかなるかなあ。って、何をなんとかすればいいんだらうな。」

ジンは今年15歳で、マチルダと同じ年だ。ちなみに、ハックとスニーが一つ下、

ジン、ケニー、マイティーが同じである。誰一人小学校すらまとも

に行っていない。

幼い頃から働かざるを得なかったため、タフさや我慢強さは人一倍だ。その意味で、

似た境遇にあると思われる「女中」と言う立場にも同情的になるのであつた。

マチルダと仲がいいのもそのためだ。そしてジンは思つ、そんな俺らだからこそ

神様がアレを授けてくれたんだ、と。

マチルダとショーロアは浮き浮きしながら屋敷に帰り、それぞれが買つてもらつた布切れで、早速裁縫を始めた。

「ただいまアリーナ。今からあなたの新しい袍を作つてあげるからね。」

そうして、ショーロアが裁縫をしていると、しばらくしてドアがノックされた。

ここへ来て以来、部屋に誰かが来るのは初めてだ。「はい。」と返事をして

ドアを開けると、アノンが立っていた。「やあ、元気かい。今日はプレゼントを

持つて来たよ。」言うなり大きな包み紙を手渡す。「空けてごらん。

」「は、はい。」

あれよあれよと言うのだが、とにかく空けてみることにした。アリーナよりも

遙かに上等なラフン人形と、清潔なワンピースが二着も入っているではないか。

「あのの・・・ここ、これは、私に・・・？」ショーロアは訳が分からない。

私今日誕生日だったかしら、などと目を白黒させていると、「キミはよく働いているからね。それと、お近づきの印だよ、それじゃあね。」

とだけ言っただけでドアをパタンと閉めて去っていった。シヨローアはマチルダの

言葉を思い出していた。男の人は、好意の証にプレゼントしてくれるのかしら。

なら、今日のジンも・・・？縫いかけの鞆に目をやる。アリーナが心持ち寂しげな表情に見えた。横には新品のラフン人形がある。

シヨローアは、ラフン人形を紙に包みなおし、ワンピースと共にタンスの奥にしまい、鞆の裁縫に戻った。アリーナが笑った気がした。

「よし、揃ったな、行くぞ。」ジンは小さな声で言った。

ダンスウィズウィンド、通称ダウィ団は全員真夜中に集結した。

真夜中なのは人目につくのを恐れるからだ。一行は手に手に

シャベルやツルハシなどを持っている。炭鉱夫だから掘るのはお手の物だ。

そのまま真っ暗闇を山のほうへひたすら一時間ほど歩くと、

急激に切り下る崖に到着した。前もって一人ずつが用意してある

ランプに火をつける。「気をつけろ、ゆっくり降りろ。足を滑らせるな。」

ここは巨体のマイティーが一番苦労するところだ。皆少しずつ降りる。

ある程度降りたところに、枯れ草を敷き詰めてある場所がある。

「よし、荒らされていない、今日も誰にも見つかってない。」とサニーが呟く。

「ここだけは、誰にも見つけれられてたまるかよ！」とジンが吠える。

横穴に入ると、壁に苦勞して取り付けたへこみの2箇所ほどにたいまつを  
乗せ、火をつける。これで洞窟内の視界が利く。そんなに広くない。  
それぞれ、武者震いをしてツルハシを手に取る。「今日はここを掘  
ろう。  
きつと出てくる、ここからも。」

五人は必死に固い壁にツルハシやスコップを打ちつける。10分  
もすると、  
キラツと輝くものが出てきた。「いやっほう！今日もお宝発見！！」  
五人は肩を抱いて喜び合う。ここは、エメラルドの原石が出てくる  
のだ。

ただし、あくまで原石だし、大量に持ち運びは出来ない。それぞれが  
バケツ一杯分程度もって帰り、裏ルートを頼って裁けば、それぞれの  
給料3ヶ月分ぐらいにはなるのだ。少し前にハックが行った裏切り  
と言つのは、

勝手にこの洞窟、通称「希望の横穴」を一人で採掘したからだ。

最初にこの洞窟を見つけたのは、五人で適当に探検をしていた時  
だった。

その時、たまたま入り込んだこの洞窟は、掘らなくてもエメラルド  
の原石が

露出していた。五人は取り合えず持って返って、駄目元で炭鉱の  
親方に見せたら、これは本物の宝石だ、どこで見つけたんだと言わ  
れ、

慌てて拾ったと嘘八百を言って誤魔化し、以降、あの洞窟は五人共  
有の

秘密になった。どうにかして売れないか、とルートを探したら、裏  
世界の

マフィアの故買屋が買ってくれることになり、一月に一度、体力の

許す時に  
ここへやってきて、こうして原石を持って帰っているのだった。ダ  
ウィ団は  
言わば宝石採掘団なのであった。ただ、どれほどの原石が眠ってい  
るかは  
わからないが、掘りつくすまでは絶対に誰にも教えない事になって  
いる。

五人は急いで帰路に着き、指定されている山小屋の鍵を開け、そ  
こへ  
バケツの中身を置いた。そして、ジンが故買屋の家に報告に行き、  
10日後に、とある汽車の駅前で待っていていれば、報酬を渡してもら  
える  
約束になっている。故買屋も本当は場所を知りたいのだろうが、ジ  
ンらは  
決して教える気はない。それに自分で掘るのも億劫なのだろう、一  
度も  
聞いてこないのだった。

朝日が白んできた。五人はくたびれて家に帰った。ジンはなぜか、  
希望の横穴にシヨールリアと二人で行ってみたい、などと考えていた。

シヨールアがグレゴール邸に女中として働きに来てから一ヶ月ほ  
どが  
経った。シヨールアはモロチヨフ執事の部屋に来ていた。横にはナ  
ポロエンが  
いた。最近シヨールアの姿を見つけたら必ず傍にくるようになって  
いる。

「よくがんばってるね。はい、給料だよ。」最初の印象どおり、

人当たりの

柔らかい執事は、ショーロアに給料を渡し、さらに忠告してくれた。  
「金庫を持っているかい？誰かに取られるかもしれないから、小さな金庫を買っておいたほうがいい。欲しければ格安で手に入るからこちらから注文してあげてもいいよ。」聞けば100ラフンだと言う。

ちなみに給料の額は400ラフンだった。金庫か……。どうしよう。

一旦誰かに相談します、とだけ答えて、ショーロアは部屋を出た。まずはマチルダさんに相談しよう。と思って歩いていたら、アノンに会った。

アノンはプレゼントの一件からも、なにくれとなく目をかけてくれている。

こつそりケーキや七面鳥の丸焼きの残りをくれたりするが、深く話し込む事は避けているようだが、理由はもちろん知る由もない。

アノンのほうにはもちろん理由はある。相手の年齢を考慮しているし、

家の女中なのだから他の誰かに手をつけられる事もあるまい、もう数年

してから口説くことにしよう、などと考えている案外したたかな男なのであった。

それに名家の御曹司が、どこの馬の骨ともわからぬ、いわば「下女」に

惚れているなどばれたらまずい、等とも考えている。もちろんアノンは

ジンの存在など知るよしもない。

「キミ、今日給料日だったろう。」よく知っている、と思ったが素直に

「はい。ありがとうございます。」と言うと、手元に持っている袋を差し出す。

「金庫だよ。盗まれないように持っておきなさい。ここを釘で打てば金庫ごともしっかりいけなからね。」よく見たら袋に金槌と釘も入っている。

至れり尽くせりとはこのことだ。思わず微笑むと、アノンも嬉しかったようで、

にこやかに去っていったが、シヨールアの中では彼はどこまでも奉公主の

息子でしかないのであった。ナポロエンの視線を感じた。ナポロエンの

表情は、よくやるよあいつも、と言う感じであった。シヨールアは頭をなでた。

次の日曜日がやってきた。初めての給料日の後だから、シヨールアは

本を買おうと思っていた。それに、ちょっとずつトレロの街の地理にも

明るくなってきていたので、今日は一人で歩こうと思って、そうマチルダに

伝えた。すると、教会への道すがら、マチルダはどこに何があつてとまた細々と

教えてくれるのであった。何かあつたら交番に行くんだよ、と教えてくれる。

マチルダさんは本当に善人なんだ、とシヨールアは思った。いつか、マチルダさんが女中と言う身分から解放されますように、とシヨールアは

我が事を忘れて教会で神様に深く祈った。この祈りは、やがて思いもかけない

形で実現される事になる。

「遅いな・早く来てくれよ。」ジンはポケットに手を突っ込んでそわそわしていた。

いつもならもう来る時間なのに。さらにしばらく待つと、そこへ、いつもの黒服が

やってきた。「いつもご苦労だな。今月分だ。」黒服の男がジンに分厚い封筒を渡す。

「ありがとう！またよろしくな！」ジンは奪い取るようにそれを受け取り、

すごい勢いで走り出した。今何時だよ、早く行かないと祈りの時間に間にあわねえ！

ジンは、ショーロアに布切れを買ってあげて以来、実は毎週日曜日に

なると、会いたいと思っていたのだが、いかんせん金が無かった。無くたって

会いに行ってもいいのだが、どうにも理由付けに困る。それにマチルダが

一緒にいるに決まってるから何か奢らされるのは間違いない。

やっと、宝石のお代がもらえるのが今日だったのだ。どれほど待ちわびたか！

それなのに、時間ギリギリかよ！教会から出られたら、どこにいるか

知りようもない。しまった、ハックあたりに張り付かせておくべきだったか。

いや、どっちにしる連絡手段がないか。ハアハア走りながら考えていたら

道路の向こう側をテクテク歩く一人の女の子がいるではないか。

あれは間違いなくシヨローアだ、と思わず道路を横断しようとしたら、馬車に轢かれかけた。「バツキャローツ」と馬手に大声で罵られた。おかげでシヨローアに存在を気づかれた。ジンはや、やあと手を上げた。

「こんにちは、どこに行くの？」とジンに声をかけられた。ずいぶん息が荒い。

「こんにちは、今から本を買いに行くんです。どうして息が荒いんですか？」

ジンがシヨローアに会うために全力疾走してきた、なんて夢にも思わない

シヨローアは素朴な疑問を尋ねた。まさかジヨギングしてたのかしら、でも服は

お洒落にしているし・・・と、ジンの目を覗き込んでいると、「いや、特に

理由はないさ、うん。本！奇遇だなあ、俺も本屋に行く途中なんだ、一緒に

行こうぜ。」なんだか様子がおかしいけれども、この前布切れも買ってもらったし、

実はシヨローアは、人通りの多すぎるトレロの中心街を一人で歩くのに恐怖を

感じていたところだったので、ちょうどよかった、と思った。マチルダさんの

友達なら心配ないわ、と。「じゃあ一緒に行きましょう。」と二人は並んで

歩き出した。間には一匹のボディーガードがいた。

とにかく、呼吸を整えねば。と、ジンは思った。呼吸は幸い落ちてきてきたが

今度は心臓のほうがバクバク言っている。何か話さねば、と思うとどうも妙に距離が遠い。何故かという理由はすぐに分かった。グレゴール家の

ムク犬が間にいるからだ。邪魔だこのバカ犬、と思ったが、そう言えばマチルダが

いないことに気づいた。「マチルダとは今日は一緒じゃないの?」

「はい、今日は本当は一人で街を歩いてみたかったんだけど、やっぱり不安だし・・・。」

なんてけなげで可愛いんだ、この子を俺が守ってあげたい、とジンは思った。そんな感慨に

一人でジーンと浸っていたので返事をするのを忘れたので、会話が終わってしまった。

何か話をしないと、とジンはあたふたした。ジンはショーロアと会話したいのだ。

「どんな本を買おうと思っているの?」とジンは聞いた。「グレゴリオの

告白、と言う本です。」「ジンもその本は読んだことはないがタイトルと

大体の中身は知っていた。クーラスト教徒であるグレゴリオが、幾多の試練や

悲哀に耐え抜いて、信仰を堅く守りぬいた話で、聖書の中でも聖者という

事になっている。「なるほど・・・ショーロアは神様を信じているんだな。」

「ええ、もちろん。ジンさんは信じていないのですか。」「わから

ない。」

ジンは呟くように言った。

「いるかいなか分からないものを信じられない。」

もし神様がいたなら、俺はもう少し幸せじゃないといけないような気がする。」

「私も・・・そう思う時があります。でも、神様にお守りいただきな

いと  
私、耐えられないと思うんです。」いまだ留め金の壊れたままの  
お父さんに

もらった口ザリオは、今日も大事にポケットの中にある。今日、直  
しに行こう。

「神様の代わりに俺が・・・。」「えっ?」「い、いや、なんでも  
ないさ、なんでもない。

もう堅苦しい話はやめよう、ほら、着いたぜ。」ジンは大急ぎで本  
屋に入った。

「まずい事になったな・・・よもや、ゴド・ゴールとレンニが手  
を組むとは!

あの軍国主義者と社会主義者が。これで、ラフス国は背後の憂いを  
絶ったということになる。」ハンムル国外相、トレイニーは苦虫を  
噛み潰した顔で言った。「全く驚天動地だ。日ごろからあれほどお  
互いを

罵倒していたと言うのに。」と言ったのはハンムル国国防省、ビス  
ラク。

「ゴド・ゴールの野郎の狙いは間違いなく我が国をはじめとした西  
方の

国々を侵略する事でしょう。一方のレンニはおそらく内政が行き詰  
って

いるので、軍事費を削減し、集団農場の再開発に予算を振る為に  
同盟を結んだのでしょうか。」とは、内務相ククルの発言。

ハンムル国内閣閣議の場で、中央で首相であるハサムは、じつと

目を瞑って考えていて、一言も口をきかない。ビスラクは続ける。  
「仮に、ラフス国が総力を挙げて我が国に侵攻してきた場合、おそらく半年持ちません。」部屋にどよめきと失望の声が響く。実際その通りで、下手をすれば半年すら持たない。国力に差がありすぎるのだ。ハサム首相が口を開いた。「イグランドとの同盟交渉はどうなっている？」  
トレイニーが答える。

「残念ながら全く進展がありません。間違いなく火中の栗を拾う気がないのでしよう。」ハサムはかけていた眼鏡を外した。「誇りあるハンムル国に戦わずして降伏の道だけはありません。国力を挙げて防衛力を高めよ。国家予算の半分を防衛費につぎ込め。必要なら国債も発行し、広く国外からも資金を集める。座して死を待つ事はしない。」内閣は一致してその方針で固まった。後は、ラフスの侵略がいつなのか、を待つのみになった。

ショーロアは寢床にいた。横にはアリーナが添い寝している。今日買った「グレゴリオの告白」をひたすらに読んでいる。グレゴリオはクリストの死後の復活を信じるがゆえにラーマ帝国に捉えられ、逆さ吊りにされ、それでもなお信仰を捨てなかった。鞭で打たれ、食事も与えられず、牢屋に閉じ込められたまま死ぬ。

グレゴリオは最後に言う。私が最後まで信仰を捨てない、この事

実こそ

神の存在のおかげであり、クリストの恩寵であり、その復活は真実なのだ。

シヨールアは本を読み終え、うつすら浮かぶ涙を拭いた。私にこんな勇気があるかしら、と疑問に思った。あらゆる艱難辛苦に耐え、信仰を捨てない、このことが出来ないかも、と思う時、シヨールアはそれが私の弱さなのだ、と思った。もっと強くなりたい、と思った。

ふと、今日会ったジンのことを思い出す。彼は、神様を信じられないというような事を言っていた。にも関わらず、彼はとても強い人だった。

彼は孤児だったらしい。生まれてからずっと一人ぼっちだった。

孤児院で育ち、10歳ぐらいから働いて、今も炭鉱で石炭を掘る仕事をしていると言っていた。体もがっしりしているし、話も面白かった。それに、何か、力が溢れていた。それが何なのか分からないけども、私みたいに神様を頼りにせず、自分を信じて生きているのはわかった。シヨールアは、彼のような力を身につけたい、

そう思うようになっていった。ジンに直してもらったロザリオは首にかけられるようになった。シヨールアは、次第にラスカルお父さんや

シヨエリアお母さんの事を想わないようになってきていた・・・。

さらに数日経ったある夜、信じられない出来事がシヨールアに起こった。

夜の0時ごろ、ほとんど誰もが寝静まる頃、シヨールアは目を覚ました。

どうも、ノックの音がする気がする。耳を澄ますと、確かにコン、コンと

鳴っている。誰だろう、マチルダさんかしら、と思いながら戸を開けると、  
信じられない事にジンがそこにいる。声を出そうとすると、口を押さえられた。  
どこから入ってきたの、とフガフガすると、OKマークを出して、  
着いて来いと  
合図する。混乱しているのでそのまま着いていくと、倉庫の扉がちよつとだけ  
開いている。

どうやって開けたのかしら、これはひよつとすると夢かしら、などと手を引かれるままにしていると、ジンが「夜中の大冒険の時間だぜ。」

なんて言うから、どうやら夢ではないと悟って、「こんな時間に外出したのが  
ばれたら大変な事になるわ!」と言うと、「大丈夫、マチルダに上手く

やってもらうからよ。話はついてる。」なんて言う。ショーロアが何も言えずに

いると、ジンはグングンと街外れのほうに向かっている。いつの間にか

手もつないでいる。男の人と手をつなぐのは初めてだ、と気づくとショーロアは

顔が赤くなった。幸い、夜の闇の中なので気づけなかった。

「どこへ行くの?あんまり遠くに行くと・・・。」と言うと、ジンは「もう着く。そこさ。」

と指差すほうを見ると、それは、たしかハンニミトスと呼ばれる古城だ。もちろん

ショーロアは入った事もない。と言うか入れるのだろうか?そんな

シヨローアの杞憂はあっさり解消した。門には鍵はかかっていなかった。

と言つか開いていた。が、これはもちろんジンが事前に扉をよじ登って

開けておいたのだが。「一度さ。」ジンがランプに火をつけながら言う。

「誰にも邪魔されず二人つきりになってみたかったんだ。」と言って笑った。

シヨローアはそんないたずらっ子っぽい笑顔を見た事がなかったので

つられて笑ってしまった。「そうなんだ。でもよく忍び込めたね。」

「種明かしをしようか。マチルダに靴を買ってやったのさ。ふふふ。」

なるほど、マチルダさんならどこの鍵でも夜中に持ち出す事は可能かも

知れない。女中長ミサさんは人に丸投げする性格だし。

らせん状の階段があつて、中央の塔の下階層に、広場のようなバルコニーのような場所がある。二人はそこで立ち止まり、夜空を見上げた。

「見るよ、満月に無数の星がまたたいているぜ。」古城の一番高い塔の先端を

掠めるように、くつきりと満月が光輝き、さらにその周りにも煌く星たちが

夜空を満たしている。「綺麗・・・夜空なんて久しぶりに見た。私たちの部屋は

地下だから一切夜は外は見れないのよ。」

「そう聞いていたんだ。だから、シヨローアに、今日の夜空を見せたかったんだ。」

と言ってジンは鼻をこすった。我ながらキザだあ、と思った。似つかわしくない

台詞を吐いて恥ずかしくなって、慌てて鞆からパンケーキを取り出した。

「食べようぜ。」「うん、ありがとう。」二人は城壁に背中をあずけ、ジンの

持ってきたパンケーキを食べた。秋の夜長はやや肌寒い。二人は、自然と近くに体を寄せた。

「今日はさすがにあのムク犬も来ないな。ははは。」「あら、いたら駄目だったの?」

「えっ、いや、その、。あ。」「え?」「手、荒れちゃってるな。」確かに

ショーロアの両手は慣れない家事全般や掃除などで、随分と荒れてしまっている。

ジンはそつと、ショーロアの手の平をなでた。「でも、それならジンの手だって、

傷だらけ。」ジンは毎日炭鉱を掘っているのでちょっとやそつとの怪我はなんともない。

ごつごつとして、マメがいっぱい出来てしまっている。「俺はもう慣れちゃったさ。」

「じゃあ、私もそのうち慣れる!」二人は見つめ合って、ニコツとした。

「いつまでも、このままじゃないぜ。」ジンはギラギラ目を輝かせた。

「きつと、きつと俺がショーロアを助け出してやる!」「助け出すって。。。」

「簡単だ。俺が大金を稼いで、ショーロアをグレゴール伯爵から買うんだよ。」

そうすれば、晴れてショーロアは自由の身さ!」ショーロアは真剣

にジンを見つめた。

「どうして、そこまで言ってくれるの。」「えっ？そそ、それはだね……。あつ。」

「えっ？」二人の視線の向こうから、見覚えのある巨大なムク犬がのっそりやってくる。

「……。アイツ、ショーロアの飼いだっただけか……。」「違うけど、あの家での

私の一番の友達よ。」ナポロエンは当たり前のように二人の間に割り込み、大あくびをした。

二人とも、声を上げて笑った。月と無数の星たちが、彼らを見守っていた。

それから10日ほど後に、グレゴール伯爵は、隣国ラフスへ来ていた。

事前に連絡をしていたので、ラフス国防衛省に入るのは簡単だった。

恐ろしげな鳥獣のブロンズ像のある応接室に通された。心なしか屹立の兵隊までもが殺気だっているように感じた。近いのか、と伯爵は

一人思っていたら、防衛省の武器調達課の課長であるイメージスと言う細眼鏡の優男が入ってきた。簡単に挨拶を交わし、本題に入る。

「……。余剰生産能力はまだまだある、と……言う事ですね。」

「工場さえ破壊されなければ、御国がこちらに来た後でも示した数値の

受注を受ける事は可能でしょう。」「客は誰でもいい、とのお考えか。

あなたはハンムル国の伯爵号を頂いていると認識しているが。」

「こんなもの。」と、グレゴールは胸の金の徽章を指していった。  
「国が滅びればただのゴミです。」「ほっほ・言いますねあなたも。」

イメグスは内心、この手のタイプは利害関係で簡単に人を裏切るタイプ、

と分析した。必要なくなれば切ることにすべきだな、しかし、今のうちから

ハンムルにも生産拠点を確保しておく事は、先につながると言う意味でも

価値がある・・・。「わかりました。それでは、契約書に調印しましょう。」

私は、ラフス国首相代理の委任状をもっておりますので・・・。」

グレゴール伯爵は、ラフスとも武器製造契約を結ぶ事に成功した。早速受注を受け、密輸をする事になる。つまり彼は、自国の兵や民衆を殺すための兵器の受注を受けた事になる。死の商人である彼にとって、誰が死のうが、誰がこの国を征服しようが全くどうでもよく、

ただ彼の財産がどこまでも増えてゆき、巨万の富を得る事のみが彼の世界の全てなのであった。その為にならなくてもした。そう、ラスクルの会社を手形詐欺にかけて潰したのも彼であった。

お得意のライバル製鉄会社の依頼でもあったのだが、彼はどこまでもお人よしの馬鹿に過ぎなかった。そう言えば、娘はうちの女中になっていたっけか。どうでもいい事だが。

その後しばらく経ったある日に、ショーロアが窓拭きをしていると、庭で

アノンがフェンシングの鍛錬を積んでいるのが見えた。あの人、華奢に

見えるのに意外と力強い感じ、とぼんやりと思っていた。そう言えばあの人は大学生なんだっけ、私もいつか、また学校にも通いたいな・。  
などと考えていた。

窓拭きを続けていると、アノンが戻ってきた。「ご苦労だね。ひよつとして

僕のフェンシングの練習が見えた?」「はい、見えていました。強そうだな、

と思ってました。」「僕は全国学生大会でベスト8なんだよ。いつか君にも

試合を見せてあげよう。」「ありがとうございます。」「キナ臭いことになりつつある。」「

と、珍しく真面目な顔で話しかけてくる。」「・・・どういうことですか?」

「隣国ラフスが、我がハンムル国に攻めてくるかもしれないんだ。」

「えっ・・・。戦争になるのですか。」「まだわからないが、もしもそうなった場合は

僕もきつと戦争に行くよ。僕はこの国が好きなんだ。だから戦うし、その為に

最近体を鍛えているんだ。」「シヨールアはなんとも答えられなかったが、

この国が大変な事になるかもしれない、ひよつとするとお父さんもお母さんも

みんな死んでしまうかもしれない、と考えて青ざめた。」「まだ、わからないさ。」「

その表情を見て、アノンはわざと気さくな声で言った。そして、「もしもの時も

君だけは必ず助かるように親父に言っておくからさ。」「と言ってウインクした。

ともかく、そう言われるとお礼を言うべきだと思って、ありがう  
ございますと言うと

アノンは去っていった。戦争・・・その時ショーロアは、倉庫にあ  
ったたくさんの

弾薬の事を思い出していた。

ジンは、なんとなくイライラしていた。最近考える事は二つしか  
ない。

一つは、ショーロアの事。週に一度は会っているけれども、物足り  
なく感じている。

毎日会えたら、と思っている。そして、必然的にもう一つの事、大  
金が欲しいにつながる。

いくらなら女中を買い取れるのかなんて、周りの炭鉱夫らに聞いて  
も誰も知るよしも

なかった。そこで、夜になってそこの居酒屋に乗り込み、ポテト  
をかじりながら

近くの酔客に聞いてみると、詳しく知らねえけど100000ラフ  
ンぐらいじゃねえの？

と言われた。クソツたれ、月給1500ラフンしかないんだぞ、ひ  
たすら全部を貯金に

回せても何年先なんだよ。そんなある瞬間、石炭を掘りながら、ジ  
ンには一つの

アイデアが閃いた。「希望の横穴」の宝石を全部売っちゃえば・・・  
それぐらいには

なるんじゃないか？いや待て、あそこは俺一人のものじゃない、ダ  
ウイ団五人のものだった。

なら、今度近くに似たような洞窟がないか探してみるのも手だな。  
あそこに

あれだけの原石が眠っているなら、近くの土層自体が宝石を含んで

いるかも  
しれない。この事をダウイ団で話すべきか？裏切り行為と間違われかねないな。

昼飯の時間になった。めいめいが腰の袋に入れてきた乾パンなどを食べる。

近くにマイティーがいる。マイティーは無口で、余り相談事には向かない

タイプだが、一応話しておこう。秘密事をしないのがダウイ団だからな。

「・・・と言う事で、今度一人で探しに行こうと思うんだが、いいか？」

「いいと思うよ。」と即答が返ってくる。よし、次はハック辺りに・・・。

「全部売っていいと思うよ。」とマイティーが言う。えっ？今なんて言った？

「あの子の事好きなんだろ。なら売ったらいい。」だけ言ってマイティーが

普段無表情なくせにニコツと笑った。ジンは泣きそうになった。

ダウイ団の会合がその日の夜行われた。場所はジンの家。ジンはドヤ街のボロアパートに一人で住んでいる。少し向こうの同じくボロアパートに

にマイティーも孤児なので一人暮らしをしている。二人で住めば家賃その他が減るが、

マイティーの図体が馬鹿でかいのでジンは却下している。

「本当にいいのか。俺らの臨時収入がなくなっちまうんだぞ。」

ジンは何度も念を押す。一月一回の苦勞で、三か月分程度の収入がこの一年以上ずっと入ってきていたのだ。おかげで5人は随分楽な生活を送ってきたはずだ。「おうよ。人助けのためだ。情

けは

人のためならず、人は世につれ世は人につれ……。」「と、ケニーがおちよける。

他の三人も意見は変わらない。「金なら働いてれば毎月入ってくるじゃん。」

炭鉱夫の仕事だけでも十分だぜ。」「サニーは言う。本当は一番体が弱く

いつもしんどそうなくせに、何強がつてんだ、とジンは思った。

「俺はジンに借りがあるしなあ。」「ハツクは笑って鼻をすすった。

マイティーは

相変わらず無口だが、意見は変わっていないのだろう。となると本当に

4人全員が賛同してくれている。ジンは不意に土下座した。

「みんな、すまない！だが、一つだけ約束してくれ！」四人が固唾を飲んで

見守る。「『希望の横穴』が無くなっても、ダウイ団は不滅だと！」

同時にオオオツと歓声が上がった。同時に、隣の部屋の住人が

うつせえクソガキどもっ！と叫んだ。五人は静かに、互いに硬く握手を交わした。

その週の土曜日は、祝日と重なったらしく、炭鉱は動かなかった。そこでジンは、いつも掘り出した宝石の原石を買ってくれている故買屋の

アジトを訪ねた。正直、極力会いたくない人間だが、今日は直談判せねばならない。

呼び鈴を鳴らすと、庭につないでいるドーベルマンが気が狂ったように吠え出した。

毎度毎度バカ犬め、いい加減覚えろと思ったが、ま、これなら、いるなら必ず

出てくるからいいやと思っていたら、案の定出てきた。片目は義眼で、ぎよろりと

飛び出そうに見える。背が低く、足も短く、その癖異常なまでに黒いオーラを発している。

まさにマフィアそのものだが、そのマフィアに頼らなければ、シヨ  
ーロアを救えない。

「おつ、オメーは宝石少年じゃないか。この前採掘したばかりだろう？」だみ声で、

マフィアであるツールは言う。「今日は別の用があつてきたんです。  
」「へーっ、

さては買い取り価格を上げろってか。まあ立ち話もなんだから上がれよ。」相変わらず

ドーベルマンは唸っている。コイツの首輪が取れませんように、な  
どと思いながら

アジトへ上がりこむ。平屋形式で、Toolの家も兼ねている上に、  
さまざまな

故買物、窃盗品や借金の代わりに取り上げた家具から何からがそこ  
らじゅうに

置き散らかしてあつて、ほとんど廃墟そのものである。埃まみれの  
ソファーに座らされ、

Tool本人も普通にその向かいのソファーに座る。「お前名前なん  
だっけ。」

「ジンです。」「ジンか。で、何の用だ?」「タバコをくゆらせなが  
ら聞く。

「実は、宝石の眠る洞窟を丸ごと買って欲しいんです。」「さしもの  
Toolも

そんな願い事を聞かさせるとは思わなかったらしく、義眼でないほ  
うの目まで

少々飛び出した感があった。「おう？洞窟の場所を教えるってことかいそりゃ。」

飲み込みの早い男だ。「そうです。」「堀りに行くのが面倒になっただって事か。」

「違います。まとまった大きなお金が必要なんです。」「ジンの目は真剣そのものだ。」

そのまっすぐな瞳は、人をひきつけずにおかない不思議な魅力を湛えている。

「・・・理由はなんだ。バクチですったのか。」「違います。・・・実は、女中を

買いたいんです。」「女中を買いたい！？おい宝石少年、お前仕事なんだ。」

「炭鉱夫です。」「トールは、最初、途方もない冗談だと思った。もしくは恐ろしいほどの

世間知らずか。女中と言うのは世間一般では王侯貴族が富豪が所有するものと相場が

決まっている。そう言おうとしたが、ジンの目は嘘も言っていないければ狂ってもいないし、

阿呆の目でもない。困惑したトールは、もう一度聞いた。「女中、を、買うんだな？」

炭鉱夫のお前さんが「はい、ある家に使われている女中を自由の身にしてあげたい

んです。」「トールはようやくと意味が分かってゲラゲラ笑い出した。「なんだ、色恋沙汰かよ。早く言えよ。」と言うと、立ち上がったどこかへ行き、

すぐに分厚い帳簿らしきものを抱えて帰ってきた。「んーと、今日までのエメラルド

鉱石×○の売り上げは・・・500000ラフン弱か。」聞いていたジンははっとした。

一年少しでそんなに儲かったのか、と。の割には、俺らの貰いが随分少ないような

気がするが……。まあいいか。

「おい、直感で言え。後どれくらい出そうだ？」トールの目が、今までとは別人のように

鋭くなった。「まだまだ掘っていない部分があります。最低今の倍は出ます。」

ハッターだ。根拠はただ一つ。1000000ラフンもらえれば、ショーロアを買い戻せる。

「お前、馬に乗れる？」いきなりこんな質問をされた。「いや、無理です。」トールは

チツと舌を打つ。「野郎と相乗りなんざしたかないが、まあ仕方ないか。おい、行くぞ。」

「どこへ？」「決まってるだろうが、見に行くんだよ、その洞窟を。」とつさに判断に

迷った。金を貰う前に場所を教えたら、殺されて無料で教えた事になっちゃうのでは……。

「見に行かないと駄目ですか？」「当たり前えだ。心配すんな。いくら俺らがクズマフィア

でもな、たかだか1000000ラフン程度のシノギでいちいち人なんざ殺さねえよ。」

その後、まじまじとジンを見つめて言う。「この業界も慢性人手不足でな。いちいち

人殺してマツポにパクられてちゃやっていけねえんだわ。と言う事でおめえ入らねえか？」

ジンは丁重にお断りして、一頭の馬に乗って「希望の横穴」へ向かった。

「おいおい、こんな崖を降りるのかよ。怖えな。」言いながらトール

ルはよたよた

着いてくる。さっきの手綱捌きを見る限り運動神経はよさそうなので気にせず

さつさと先に行く。昼間に来たのは最初以来二回目だ。やはり太陽の下だと

夜中より遥かに容易に辿り着けた。カモフラージュの枯れ草もそのままだ。

そもそもこんな急激な崖を降りようなどという奇特な人間はいなかったのだろう。

だからあんな宝石が野ざらし状態だったのだ。トールも到着した。

「この中です。」

「ほほう……花崗岩の断層だなこりゃあ……。あっちこち掘ってはいるな……。」

言いながら土を触ったり壁を蹴ってみたりしている。実際に見て何かわかるのか、

ジンには想像もつかないが、まあ気の済むまで見てもらうしかない。

「よし、買った。」と突如トールが言った。ジンは振り向いたが、

トールは既に

出口に向かっていて。「ほ、本当ですね。」「ああ、帰るぞ。」「一

体何を根拠に

決断したのか皆自分からないが、ともかく買ってくれたのだ。後は値段だが、

それはアジトに帰り着いてから聞こう。帰り道、トールがかい声で「そんでよお、その女中つてのはべっぴんなのかい。」と聞いている。

「はい、とても可愛らしい子です。」「いくつなんだよ。」「12歳です。」

「クソガキじゃねえか。つってもお前もか。一緒に住む気なのか。」「いや、故郷が

スエバラーのほうにあるらしく、そこへ一旦帰ってもらおうと思っ

てます。」

「山の向こうじゃねえか。でよ、今どこで働いてるんだ。」一瞬話  
すか迷ったが、

機嫌を損ねられるとまずいと思って「グレゴリー伯爵と言う人の屋  
敷です。」

トールの眉毛がぴくつと動いた。「そうか、そいつは難儀な話だな  
よりによって

とんでもない家だぞそこは。」「どういうことですか!？」「長く  
なる。帰ってから話す。

大体俺の尻を触るな。」

馬の足なら速い。30分かないうちにトレロの北外れに位置  
するトールの

アジトに帰り着いた。「おい、井戸水汲んで海馬桶に水入れてやっ  
てくれ。」

言うトスタスタ行ってしまう。人使いの荒い野郎だ、などと内心思  
いつつ

井戸水を汲みに行くと、またドーベルマンに吠えつけられて辟易と  
した。

最近犬運がないのかも知れないぜ、と思いつつアジトの中に入ると  
トールがしかめっ面してタバコをふかしている。その前に座ると口  
を切った。

「あんな、グレゴリーの野郎だけどな、あれはふてえ野郎なんだわ。」

このトールが言うのだからさぞかし本当にふてえ野郎なのだろうと  
思い、

強く頷いて、どういう人なのですか、と聞くと「敵国に武器を売っ  
ちまう

死の商人なんだよ。」と返事が返ってきた。そう言えばグレゴリー  
家は

武器商人だったな。「おめえこの事は取り合えず今は誰にも言うなよ。」

命が惜しかったらな。「ジンはごくり、と唾を飲んだ。いちいちトールが

言う事には、マフィアだけに真実味と迫力がある。「とにかく金になるのなら

なんだってするゲスゴミなんだよ。」一瞬「あんたが言うか。」と部屋を

見渡しながら思ったがもちろん口には出さない。「つまり・・・」

「そう。てめえんとこの女中にもあたうる限りの馬鹿高い値段をつけてくるだろうな。」

ジンは落胆した。せつかくここまでは上手くいっているのに・・・

「しかもあの野郎は

伯爵だろう？ハンムル国に対する愛国心も何もあつたもんじゃねえ。

「

「その事をハンムル国に言えば、なんとかありませんか？」「証拠がねえんだよ。俺は100%本当だと思ってるが、出せる確証はない。聞いたルートも故買屋ルートだし、名前出したとたんこつちが逆に捕まってこれだ。」と、首を切る真似をする。ハンムル国はマフィアに

厳しいらしい。「だがな。つまりな。」トールが顔をぐいっと寄せてくる。

「お前がその確たる証拠、つまり、グレゴリーのゲスゴミがラフス国と

武器の売買をしてる証拠を手に入れられれば・・・奴はジ・エンドで自動的にその女中とやらも自由の身になるぞ？」ジンはまた唾を飲んだ。どうもトールと話していると心臓に良くない。「一体どうすれば・・・」

「俺は腐れマフィアで人間のクズだ。これまで人殺し以外の悪事はほとんど全部やってきた。」と、一旦話を切るとクツクツと笑う。

「だがな、こんなクズでも愛国心だけはある。てめえの生まれ故郷が大好きなんだ。死んで骨を埋めるのはハンムル以外に無いんだ。戦って死ぬのも無論ここだ。」トントンとソファアの前のテーブルを叩く。

「わかります。」「だから、グレゴリーの野郎の仕出かしてる真似だけは

許せねえ。あれは売国奴だ。」ジンにはその意味は分からなかったが、

まあどうせ悪口の類だと理解した。「俺は実は武器の密輸に使われる運送業者の名前は知っている。ゲタポシュ運送だ。覚えてるか？」うなづくジンに、トールは満足げに微笑む。「後は分かるな？」

ジンは確かな目標を手に入れて帰って行った。トールはコーヒーを入れて  
ブラックで飲んでいた。「上手くやってくれりゃ、ゲスゴミは国賊として

間違いなく死刑になる。そして、ジンの女中とやらも自由になる。そうならジンにはもう金自体必要でなくならあな。まあどうしてもと言っなら

はした金を渡せばいいわな。ククク。」と言いながらも、トールにも不安があつた。

「だが、それでラフス国の脅威が無くなるわけでもないし、どっちにしる

長い命でもないな。」トールはおもむろに奥のほうの倉庫を開け、中の未開封のダンボールを眺める。「戦争になったら阿修羅になつて暴れてやらあ。」

ジンは、帰るなり早速五人をもつ一度集めた。人に聞かれたくな

いで、

街外れの空き地に行った。他の四人はジンの悲壮な顔つきに迂闊に声もかけられない。ジンは、周りを見渡して、絶対に他に人がいないのを

確認してから、実は――今日の顛末を全て説明した。

「な・・・なるほど、つまり、ゲタポシュ運送に潜り込むって事か？」

「ああ、そうなる。なんとかラフス国に関連する資料を盗み出すんだ。」

「そしてそれを、警察が何かに持っていけばいいんだな？」

知識のあるサニーがいう。「たしかそれは外患誘致罪になると思う。」

他の四人は「がいかんゆうち？」と口をそろえてキョトンとした。

「簡単に言つと外国に加担して国益を損ねることだよ。」「あ、あなるほど。」

ハックは本当はまだ理解していないが、一応そう答えておいた。

「ゲタポシュ運送って隣町にあるよな。」「ああ、トメアニア街にある。」

「ちょうど明日は日曜だから、明日の夜はどうだ？」「善は急げだな。」

「おし、なら、今日は俺一人で偵察に行つて来るぜ。俺に任せとけ！」

と、ケニーがドンと胸を叩くので、任せる事にした。他の四人は、縄紐とか必要そうな道具を集める事にした。「ダウイ団は宝石採掘団から

スパイ窃盗団に看板を変えました。」「馬鹿、愛国行為だよ、愛国右翼団になったんだ。」

「違うな。少年の恋のお助け探偵団だな！」「どれも正解じゃね？」  
と言つて五人は大笑いした。

ショーロアは布団の中にいた。何故だろう。胸騒ぎがする。アリナを

きつく抱きしめた。かすかに震えてきた。胸元の口ザリオを握り締めると、

少し落ち着いた。でも、何か嫌な予感がする。明日もきつとジンに会えるだろう。

その時話してみよう。ジンのことを思い出したら安心してきた。確実に

あの人の事を頼りにするようになってるわ。不思議な気持ち。これが、恋なのかな・・・。

と、考えているうちに、ショーロアは眠りについた。

その頃ケニーは一人、トメアニアの街へ来ていた。夜分も更けてきて、人通りも減ってきた。今日はただの偵察だから心配は無いが、思ったより夜の人通りが少ない。五人が

同時にうるつくと目立つかもな、等考えていたら、着いたようだ。大きな看板が6階建てのバラック風の建物にかかっている。

「ゲタポシュ運送」とある、よし、ここだ。大通りに面していて、周りにも同じようなビルがある。近くには交番はなかった。

裏口を探したい。キョロキョロと左右を見渡し、人のいないタイミングで

そつと建物の横に入り込み、そのまま裏に回った。いいぞ、あるある。

扉には当然鍵がかかっているが、このレベルのものは針金程度で簡単に開けられる。小学校もロクに行っていないケニーは、このよう

な

余計な技術だけは社会でさっさと身につけているのだった。

今日、中を見ておくべきか。一瞬迷った末、止めた。そこまでする

ことはない。

そう思つて帰ろうと思い、元来た通路を戻ろうと顔を出したら、向こうから

人が二人、こちらに来るのが見えた。ケニーの金玉は思わず縮みあがつた。

裏口の横手に焼却炉がある！迷わずふたを開けて頭から飛び込む。

さっきの二人は、こちらには気づいていないはずだ。向こうには街灯の

光があつたが、こちらは無しだ。最悪見つかつても、「かくれんぼしてました」

で切り抜けられるだろう。ふたをほんの少し開けておく。音で判断しよう。

扉を開ける音がした。締まつた。こんな夜中に会社に入るなんて尋常じゃ

ないぞ……。やっぱ密輸なんかやってるからか？ケニーは思案した。取り合えず、ここから出て、帰ろう。明日も、侵入も資料探しも最新の

注意が必要だな。やっぱ偵察に来てよかった。すばやく焼却炉から飛び出し、一目散に表通りに出た。たまたまいた二人の通行人がぎよつとした。それもそのはず、ケニーは顔から足までススで真っ黒だった。

ゲタポシュ運送を見上げて、どこにも明かりがついていない。

さっきの二人はどこへ行つたのだろうか？と疑問に思ったが

帰ることにした。明日……。何か武器があつたほうがいいかもしれない。

あくる日の朝、五人はジンの家に再び集まつた。作戦会議だ。

まず、ケニーが昨晚の報告をする。意外と大きな建物なこと、

鍵は楽勝で開きそうな事、そして、真夜中の一時過ぎにも関わらず

社員らしき人物が二人建物に入っていった事、その後電源すら

つかなかったこと・・・。「地下室があるんじゃないかな。」とサニ  
ーが言う。

「やばい関係の資料や実務は地下だけでやってるとか。」「可能性  
はあるな。」

「今日も夜中でも安心できないって事か」とハックが言った。

「そうだと思う、で、ジン。何か武器を携帯したほうがいいと思う。

」

「武器か・・・。マイティー、どう思う？」マイティーは黙って考  
えた後、

「あつたほうがいいけど、目立つものは駄目だと思う。」「むー。  
なら

ナイフとかか。」サニーが続ける。「相手は武器弾薬の密輸会社だ  
ぞ。

余裕で社内に銃とかおいてあるんじゃないか？」あー、と一同うな  
る。

「どうしよう。俺らも銃持ってたほうがいいのか。」「誰も持って  
ないぞ・・・。」

ケニーが言う。「俺さ、五人全員で行かないほうが却っていいと思  
うぞ。

なぜなら、五人は目立つし、逃げる時も誰かが遅れたりする可能性  
もあるし、

基本的に少人数のほうが泥棒にはいい」泥棒、という言葉にちよつと  
ひっかかったが、実質間違いではないので、そのまま流して、ジン  
が言う。

「よし、じゃあこの仕事は俺とケニーだけでやろう。後のみんなは  
すまないが家で待機・・・。」最後まで言うまでもなく物凄いブーイ  
ングに

なった。慌てて、じゃあ、二人だけが侵入し、後の三人は見張りと  
言う事にした。

「あのさ、思うけど」サニーが言う。「今日一回きりで見つけれなかったとしても、それで終わりじゃないじゃん？ ジンはなるべく早いほうが言いと思ってる  
だろうけども、今日だけで何が何でも、と思わなくてもいいと思う。何回かに分けてもいいはず。」全員同意した。

一旦別れて、それぞれ昼寝などして、鋭気を養い、夜11:30にここに再集合と言う事にした。みな家に帰っていった。ジンはごろんと横になって  
ショーロアの事を考えた。が、昨日以来色んな情報が一気に飛び込んで

来たので、今日が日曜日と言う事を忘れてしまって、その癖頭の中はショーロアの事で一杯なのだった。そうこうしているうちに、本当に眠りに  
ついた。夢の中では、ショーロアはもう解放されているのだった。

「指令135TY アル クフ ナムラ 繰り返す 指令135TY  
Y...。」

ラフス国軍参謀総長トミナスが電文を打ち続ける。出発準備命令だ。

ラフス陸軍第二、第四師団と、ラフス海軍第一、第二艦隊と、ラフス空軍

全航空爆撃隊が、西のハンムル国へと、明日日付けが変わり次第夜襲攻撃を行う。

宣戦布告もない。第一占領目標はトレロ。一昼夜のうちに占領し、首都ベラルを目指しさらに一直線に進撃する。

「いよいよだ。」ゴド・レールは高揚しつくしていた。根っからの軍国主義者で

覇権主義者で帝国主義者のゴド・レールは、数年来の軍拡の準備の間も

うずうずしっぱなしなのだった。「いよいよ、私がユーロピアの支配者になる

ときが来た。」目の前の地球儀をクルクル回す。「手始めのハシムル

など一ヶ月で完全に落としてみせる。次はダラオだ。ペスイだ。タリアアもだ。」

ゴド・レールの瞳は狂気に輝いていた。

夜11:30 予定通り全員集合し、極力目立たないように、

二人ペアずつとジンに別れ、前後になって闇夜を急いだ。歩いて30分程度で到着した。

今日も一応ゲタポシュ運送には明かりはついていない。先導のケニについて行き、

すぐに裏口に到着した。「任せな。」ケニは小声で言うと、すぐに針金で扉の鍵を開けた。「お前こっちの道に進むんだほうがいいかもな。」とハックが囁いた。

「じゃあ約束どおり、三人は見張りを頼む。誰かを見たらすぐ飛び込んできてくれ。」

マイティーは右側、サニーは左側を見て、合図でハックが中に駆け

込む手順。

中は暗い。すぐにランプをつける。「地下への階段をまず探そう。が、

探すまでもなく入って左手に大きな階段があつて、地下への階段もあつた。「よし、急ごう。」「ジンとケニーは小走りに階段を下りた。広いだけあつて、

地下には通路の向こう側に、いくつかの扉があるようだ。」「どこから入る?」

「俺の野生の勘を信じる。」「ケニーは迷わず一番手前から入った。鍵はかかっていない。

真暗闇の中、ランプの明かりを頼りに部屋の中を見渡すと、棚が立ち並び

部屋のようなだ。「いつそ電灯をつけないか?地下だから大丈夫じゃないか?」

とジンは言ったが、ケニーは拒否した。ともかく棚の目録を片端から、それぞれ

一個ずつ持っているランプで読んでいくことにした。

トコミラーナ商店 違う。サワエア食品 違う。予想していた以上に大変そうだ。

そうして一時間ほど二人はひたすらに居並ぶ棚の目録を見ていった。ジンは

頭がくらくらしてきた。地下だから知らないけれど、空気が淀んでいる気がする。

ええい、くそっ!とジンが気合を入れなおしている時、「カク秘」なる目録が

目に飛び込んできた。奥の奥の棚の一番上だ。「ケニーっ!」と呼んで、ここを

開けてくれ、と頼む。ジンには幸か不幸か針金マジシャンの力はない。

椅子を持ってケニーが飛んできた。「ここのカク秘」を開けてくれ、  
と言うと、速攻で

針金一本でその棚の鍵を開け、引き出しごと抜いた。

床におろし、一枚目の文字を読む。すると「カク秘資料 当て字  
表」と書いてある。

めくると、さまざまな言葉が並んでいる。一つ目が アンマ ↓  
ラフス国 となっている。

ケニーが「こ、これだ！」と叫んだ。ジンはもう二、三枚めくって  
見た。すると

×月。日 G - 34用弾丸 8000発 カトレフ用量産弾 15  
0000発 アンマへ発送済

二人は思わずがちりと腕を組んだ。そして、ジンがその資料を  
根こそぎ脇に挟み、

二人こそが弾丸になったかのごとき勢いで地下室を出た。外では、  
三人が根気よく

見張りを続けていた。扉を開けると同時に二人が飛び出してきたの  
で、ハックは思わず

びっくりして尻餅をついてしまった。「あ、ああったのかよ？」ハ  
ックの問いに

ニンマリとし、ジンは脇に挟んだ資料を見せびらかした。マイティ  
ーとサニーは

まだ持ち場を離れていない。サニーのみを呼び寄せ、マイティーの  
ほうへ四人は走り、

一気にゲタポシュ運送から出来る限り離れた。ひとまず、人気のな  
い細道にまで行くと、

ジンは一気に見つけた資料の説明をした。夜中なので大声は出せな  
いが、全員で

バンザイをした。これで、グレゴール伯爵は終わりだ！

「さあ、帰ろう。明日は仕事終わりにでも役所か警察にこれを持っていけばいいな。」

「せっかくなんだし、ジンは休んで持つていけば？親方には風邪とか言っとくぜ？」

「うーん、それでもいいな。でも、手柄は五人のもんだぜ？」「もちろんさ。」

「国民栄誉賞とかもらえて新聞に載るかもよ！」「うはっ俺ら救国のヒーロー！」

「女の子にモテモテになるかも！あつ、あれは！とか指差されて。イヒヒ。」

「・・・お前ら俺の事助けるってのが目標じゃなかったのか、こいつらめ！」ジンは

大喜びでハックにヘッドロックをかけた。「うるせえ！このスケベ野郎！幸せ者！」

サニーはジンにスリーパーホールドをかける。マイティーがケニーをほいっと肩車する。

夜中と言う事も忘れて大騒ぎしていた五人だったが・・・。

「んっ！なんだあれ！」肩車された、目のいいケニーが真っ先に気づいた。

闇夜の彼方からグォングォン音が聞こえてくる。「なんだ？航空機？こんな夜中に？」

「いい、一杯来やがるぞ・・・。数十機は来てる！」「本当だ！」とマイティーも叫ぶ。

「あれは・・・戦闘機だぞ！」とサニーが声を上げた同時に、目の前の我らが街、トレロに

何発もの空対地ミサイルが打ち込まれた！大轟音を起こし爆発する！途端に

空が真っ赤に染まりあがった！「何てことだ・・・。戦争が始まった

んだ。ラフス軍が攻めてきたんだ。」ハックの腰が抜けそうになる。いや、ハックだけじゃなかった。次々と響く大轟音に鼓膜が痛くなり、その衝撃と恐怖に全員その場に立ち尽くしてしまった。

空対地ミサイルの一発は、グレゴール邸に命中した。大轟音を上げて炸裂したその一発は、グレゴール・リトス伯爵の寝室に直撃し、伯爵の体を一瞬で

粉々に吹き飛ばした。伯爵は、何も聞かされていなかったのも、まだ安心して

トレロの自宅にとどまっていたのだった。爆音と共に目を覚ましたアノンは

瞬時に、これはラフス軍の空爆に違いないと判断した。皮肉な事にアノンは

本当の愛国心を持っていた。もちろん父のしている商売は知っていたが、ラフスへ

密輸までしていたとはもちろん最後まで知らなかった。むしろハンムル国のために

武器製造を通して貢献していると信じていた……。アノンは父母の寝室に

ミサイルがピンポイントで当たったのを確認した後、悲しむ暇も持たず、即座に

倉庫まで走った。

女中らが全員、今の衝撃に驚いて、地下から出てこようとしていた。

「待てっ！出るな、今はまだ地下のほうが安全なんだ！」と、叫ぶアノンの横を

ナポロエンが通り過ぎ、廊下で震えているショーロアの足元にくつ  
ついた。アノンは  
全員をひとまず地下に戻すと、倉庫の銃を片端からチェックし始め  
た。最初は空軍の  
空爆だろう。次は陸軍だ。そのタイムラグを使い、ひとまず首都ベ  
ラルに向かおう。  
そこからなら、応戦が可能だ。城塞都市ではないトレロでは戦えな  
い。ショーロアを  
逃がさないといけないし……。

ナポロエンを迎え入れて、扉を閉めたショーロアは、嫌な予感とは  
この事だったのか、と理解した。空襲が行われているなんて……。  
！ ジンは無事なのかしら！？ 神様！ ジンを守って！ 殺さないで！！

トレロ一面が空爆によって火災を広げつつある。一時茫然として  
いた五人も

我を取り戻し、ともかく森に逃げ込もう、森にわざわざ空爆はしな  
い、と

判断し、横手の森林に身を潜めた。「みんなが……死んでしま……  
う。」

サニーの言葉にジンがピクツと反応した。「ショーロア！」 叫ぶや  
否や

走り出した。4人が飛び掛って止めた。「今行つて黒焦げになりた  
いのかよ！」

「お前まで死ぬぞ！」 「うるせえ！ 離せ離せえっ！！」 「じゃあ  
行こう！」 と

マイティーが叫んだ。「全員で行つて、ショーロアだけを奪い取つ  
てこよう！」

マイティーが言うとなれば出来そうな気がする。いや、出来るんだ！ 「行

こう！」

全員走り出した。先頭に行くのはやはりジンだ！

ミサイルの直撃弾を食らったグレゴリー邸は火の回りが他の家々に比べてずっと早い。ライフルの争点をしているアノンにも目に見えて火が回ってきているのがわかる。駄目だ。この家は持たない。

家屋が崩れると、地下から出れなくなる可能性もある。諦めて外へ逃げなければ。おそらく空爆も一旦は終わっているはずだ。ライフルを肩に担ぎ、アノンはショーロアの部屋の扉を開けた。

「外へ出よう！この家はもう持たない！」大きな声だったので他の部屋にも聞こえたのか、それぞれが一斉に出てきた。マチルダもショーロアもナポロエンと共に出てきた。ショーロアの手を引きアノンも必死に駆ける。倉庫の天井もチロチロと赤い舌を出し始めた。

倉庫の大扉を開けて、アノンや女中らは外に飛び出した。

「まず森へ！」アノンはほとんど引きずるようにショーロアを引つ張る。ショーロアも必死に息せき切って走る。ナポロエンもハフハフ言いながら走る。ガラガラ・・・と音がしたのでアノンが振り返ると、まさにグレゴリー邸が完全崩壊するところだった。

「ショーロアー……ッ！」向こうの道から駆けて来る少年がいる。

「ショーロアー……ッ 生きてくれーっ！！」ジンは絶叫しながら走った。

「ジンッ！」ショーロアはアノンの手を振りほどくと、真っ直ぐに駆けて

「ショーロアッ！無事だった！」と叫ぶジンの胸に飛び込んだ。すぐ後から駆けて来た4人も抱き合って喜んだ。「生きてた！」「

生きてる！」

アノンは呆然と立ち尽くしていた。なんだ？この薄汚いガキどもは？

「お・・おいっ！お前らは何者だ！」アノンは近づきながら言った。

が、無視されている。頭に來たアノンは、間近で叫んだ。「お前らはなんだっ！」

「シヨローアの友達さあ。あんたこそ誰？」とハックが胡散臭そうに聞く。

ジンもシヨローアと離れてアノンと向かい合う。シヨローアは一歩下がった。

「俺は、グレゴール・アノン。グレゴール伯爵の息子だ。これからシヨローアを連れてラベルへ行く。さ、どけ。行こう、シヨローア。」

シヨローアは何も言わない。ジンが一步前へ出た。完全にアノンと一対一で差し向かう形になった。「嫌だ。シヨローアは渡さない。」  
「なにをつ・・・このガキ。どかないと撃つぞ！」アノンは肩から下げていた

ライフルを構えた。明らかに目が血走って極度の興奮状態にあるのがわかる。

それもそのはず、彼氏などいないと信じていたシヨローアに彼氏がつ・・！

嫉妬と空襲の興奮がアノンを狂わせている。ジンはどかない。澄んだ目で

アノンを見つめてる。シヨローアが絶叫した。「やめてええええええ！！！」の

声と同時に引き金が引かれた。胸に銃弾を受け吹っ飛んで倒れるジン。

アノンの横からナポロエンが全速力でぶつかつた。どうつと共倒れする。

そこへ、ケニー、ハック、サニー、マイティーの四人が飛びついてアノンの銃を取り上げた。ケニーの怒りはすごい。「この野郎！許さねえっ！」

三発、四発顔を殴りつける。アノンはもう失神している。が、誰も止めない。

そこへ「やめろっ！もういい！」と声が響いた。全員の時が止まつた。

泣きながらジンの体を揺すっていたショーロアは驚きに目を見開いている。

なんと胸を撃たれたはずのジンがむっくりと起き上がった。全員が目を

点にしている。「昔から言うだろ？備えあれば憂い無し、ってさ。」言いながらジンは胸から防弾チョッキを取り出した。「ひえゝ見るよ。

後ちよつとで貫通だぜ？至近距離からのライフルはさすがにやばかつたな。」

「こ・・・こいつう！」ケニーはジンに抱きついて殴る振りをした。ショーロアもジンに抱きついた！マイティーがサニーとハックを抱きしめた！

「喜んでる場合でもない！逃げないと！」サニーの一言で我に返つた全員は

ともかく、森を目指して走つた。俺たちは大丈夫だ、これからも。ジンはそう思った。ショーロアとつないだ手は硬く握り締められていた。

ショーロアも思った。この人と一緒なら、何も怖くないわ、と。

この日、トレロの街に落とされた空対地ミサイルDW-45はグレゴール商事会社の  
密輸した部品によって製造されたものだった。

ジンたちは、すぐに遥か山を越えて、シヨロアの故郷エスバラ  
ーに戻った。

ハックとサニーの家族は無事だったので、疎開と言う事で二人もと  
もかく一緒に行った。

山奥の小さな街ならまず空爆は来ないと判断したのだ。シヨロア  
と両親を引き合わせた後、

五人とシヨロア一家はさらに、北のイススに逃げようと準備して  
いたその翌日に、

ハンムル国とイグランド国の電撃的軍事同盟が発表された。ラフス  
の暴挙を許さない

イグランドは、さらに世界最強の帝国と言われるメリラ国をもこの  
戦争に巻き込んだ。

その報に怯えたゴド・レールは、一気にラフス全軍をハンムル国か  
ら撤退させた。

そして和平交渉に応じ、ともかくの平和が訪れた。

「じゃあ、俺たちはトレロに帰るよ。」冬が近づいている。吹く  
風が肌に冷たく  
なってきた。いつでも遊びに来てください。君たちには心か  
ら感謝している。」

ラスクルは本当に心からの思いを込めて言った。シヨエリアは「あ  
なた達は

私たちの神様です。本当にありがとう。」とまで言ってくれた。ケ  
ニーは

「そんな、神様だなんて、エヘヘ」と必要以上にくねくねして、ハツクに頬をつねられた。

「目が覚めたか？たえ話だよ、たえ話。」ショーロアはジンに約束した。

「ジン・・・必ず会いに行くね。」「ああ、丸一日歩く気力がそっちにあればな。」

「照れてんじゃないよ、嬉しいくせに。素直に待ってるっていいんだよ。」サニーが茶化す。

頬を真っ赤に染めたジンは大きく息を吸い込んだ。「来なきゃこっちから会いに来るさー!!」

ナポロエンが「オオオーン、オオオーン。」と吠えた。それはあたかも教会の鐘の音のようだった。

THE END

## あとがき

まだ小説の知識の無い状態でこの作品を書きましたので、一作完結なのに連載体系にしまっているのも、あとがきを最終章に変えて書いておこうと思います。発端が、某ネット掲示板でのとある方との口論、と言うかこちら側からの一方的な煽り（ヨイ、だったと言う事もあるのですが、締め切りを大変短く設定し、勢いで三日ほどでこの作品を仕上げた物です。今となつては4万文字をどうやって書き上げたのかその情熱には我ながら驚きます。と、同時に、文章のまずさや文章作法の無知にも呆れますが、これはこの時の記念、と言う事で、このままにしておく決めていきます。

口論もどきから生まれた作品の割りに、評判は酷くはありませんでした。もちろん評価されないのも覚悟の上でしたし、実際酷評もされたものですが、とにかく、書き上げた事が評価されましたし、一応物語になっている、と言われました。しかし、実はこれだけ書いても、400字詰め原稿用紙に直すと100枚前後にしかならず、普通の文庫でも1ページに最低800字程度はあるものと思われまので、50ページにしかないし、つまり単行本を出す場合この4、5倍は最低でも書かないといけないわけです。作家と呼ばれる人々の努力が想像できますね。

物語には、念頭に小公女セーラのような、世界名作劇場と、宮崎駿のアニメ映画とを置いて、書いていきました。絶対ハッピーエンドで終わらせようと言う事と、読む人が楽しめることを考えていましたので、途中にコメディ調の表現も入っていますが、物語の雰囲気壊す事は無かつたらうと今でも思います。

ただ、時代背景のすり合わせなどが適当であつたため、19世紀

のヨーロッパを想定しながら、20世紀の軍事力でもって空襲をしてしまったのはいかにもまづかったと思います。焼夷弾をばら撒いてグレゴール邸を燃やせばよかったか、と今では思いますが、それも含めての処女作品なのでそのままにしておきます。

ジンという主人公にはもうちょっと広がりを感じますが、この物語はこの形で完結がいい、と考えています。現在は予定はありませんが、またファンタジーを書くときには、似た性格の主人公を書くことでしょう。この手のキャラは暴れさせやすいのです。

個人的に満足しているのは、作者本人も読めて楽しめる作品が書けたと言う事でした。読者の皆様にも同じ思いを抱いてくだされば、作者としてこれほど嬉しい事はありません。そして、感想も書いていただければ、作者冥利につきます。それではあとがきはこの辺で終わります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3898f/>

---

ショーロアに吹いた風

2010年12月23日09時20分発行